金川曽根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報

1973.3

山梨県教育委員会

序　　文

今日の開発渦中にあって，自然保護，文化財保存が世論で大きく取り上げられております。それは自然や文化財が私達にとって掛替の無いものであり人間性を豊かにするものであるからに他なりません。埋蔵文化財の遺跡も自然と同様に現状のまま残されるのが本来の姿で，決してむやみに破壊されるべきでないことは，近来各地で開発等により重要な遺跡が破壊を伴って発見されていることを見ても理解されるところであります。

従ってあらかじめ開発関係機関と充分協議し，開発を阻まず遺跡をできるかぎり保護してゆく方途を計って，僅かではありますが成果も上って来ております。この調査もその結果，金川曾根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業の工事着工前に緊急発掘調査を実施し，記録として後世に永く残すものであります。資料として御利用下さるようお願い申し上げます。

なお直接調査にあたられた方々をはじめ，関係市町村の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和48年3月

山梨県教育委員会

教育長　清　水　林　邑

目　　次

1　三珠町上野原遺跡調査概報 …… 1

2　県営畑地帯土地総合改良事業関係
　豊富村中木原，櫛形町中野遺跡
　試掘調査結果について …… 16

3　豊富村宇山平遺跡調査概報 …… 19

例　　言

1　本報告書は金川曾根地区大規模農道建設及び，畑地帯土地総合改良事業関係の埋蔵文化財緊急発掘調査及び試掘結果をまとめたものである。

2　この調査は県費ならびに建設事業費のうち測量試験費により県教育委員会を主体として，山梨県遺跡調査団が実施した。

三珠町上野原遺跡調査概報

目　　次

◦三珠町上野原遺跡

1　はじめに …… 4

2　調査概要（日誌） …… 6

3　発掘概要　グリッド …… 8

　　竪穴遺構 …… 10

4　遺　　物　縄文時代遺物 …… 10

　　須恵器，灰釉，土師器 …… 14

5　まとめ

◦県営畑地帯土地総合改良事業関係

豊富村中木原，概形町中野遺跡試掘調査結果 …… 16

挿図目次

第1図　遺跡付近地形図

第2図　グリッド全体図

第3図　B 10 T セクション図

第4図　竪穴遺構実測図

第5図　縄文時代遺物拓本及び実測図

第6図　須恵器，灰釉，土師器拓本，及び実測図

第7図　遺跡位置図

図版目次

図版第1　遺跡全景

図版第2　(1) 竪穴遺構セクション

　　(2) 竪穴遺構全体（北から南）

図版第3　(1) 竪穴遺構攪乱ピット発掘

　　(2) B 10 T セクション

図版第4　(1) A. 8. T 石組

　　(2) 東西セクショントレンチ

図版第5　縄文時代土器

図版第6　縄文時代石器

図版第7　須恵器，灰釉，土師器

図版第8　中木原，中野試掘調査結果

第１図　1．三珠町大塚字上野原　　2．豊富村木原字中木原　　3．伊勢塚古墳　　4．大塚古墳　　5．王塚古墳

三珠町上野原遺跡緊急発掘調査概報

1. はじめに

この緊急発掘調査は金川曾根地区広域営農団地農道整備事業による大規規農道建設に先立ったもので，山梨市下栗原地内の国道20号線を起点とし，市川大門町に至る総延長30,511m，全巾7m，車巾6mのアスファルト舗装道路の一部にかかったものである。この道路建設の目的は金川扇状地の桃，ブドウ等の果実，曾根丘陵の養蚕の振興を計ったものであるが，東山梨，東八代，西八代各郡下の笛吹川東岸は，県内でも最大の遺跡過密地帯で，国指定史跡が一宮町に2ケ所[(1)]，中道町に1ケ所[(2)]存在し，先土器時代から歴史時代の遺跡が絨毯の様に存在する。この道路で昭和46年度には一宮町末木地区で重要な遺構が発掘されているし，勝沼バイパス建設工事でも緊急発掘で条里遺構が47年11月に発見されている[(3)]。又，46年中道町右左口で縄文時代の集落跡が発掘されている等[(4)]，開発工事により次々と破壊されているのも事実である[(5)]。

西八代郡三珠町大塚字上野原は，その地名が示す通り曾根丘陵南西端に位置する標高340mの舌状台地上である。曾根丘陵は，「笛吹川の左岸で，東八代郡境川村より，西八代郡市川大門町に至る東西約10Km，南北約3Km，海抜320m～400mの丘陵地帯である。前面，および，背面をそれぞれ断層によって切られた地塊で，前面は，甲府盆地に急傾斜をもってのぞんでいるが，背面は断層崖で限られ，この断層崖は，著しく開折されている」[(6)]。又地質については，上部より，ローム層，扇状地，崖錐堆積層15m，砂礫，粘土層40m（珪藻土，植物化石含む）火山性堆積層，火山泥流50m，火山砕屑岩90m基盤岩となっている。また曾根ローム層については上部と下部にわかれ，上部は赤褐色で表面は風化して亀裂を生じている場合が多く，下部は黄褐色でしまった感じのするロームである[(6)]。

この上野原台地周囲には多くの古墳群が存在し，散布地が分布しているが，ほとんど明治，大正，昭和の時代に破壊されてしまっているのは，このベンチ状地形の農業用地としての利用が高度であった為であろう。従って桑木の植え換え作業やゴボウ栽培により，墳丘の崩壊，土器の散布はおびただしいものがある。地元の古老の話によればゴボウ栽培で約1m掘り下げると炉跡や土器等が多量に発見されたとのことである。この度この様な道路が建設されるのは，農業振興にとって誠に望ましいものではあるだろうが，あくまでも文化財保護との調和の上で進めてゆきたいものである。

この台地は北東に延びる舌状台地で，台地上平坦部は巾約100m，長さ1Kmで，中央部に上野原部落がある。大規模農道は南斜面を北東の豊富村から斜めに登り，部落南側の平坦地にでてくる。そして平坦部を西へと横切り熊野神社西側へ抜けるが，47年度は豊富村との境から350.32mが工区で，このうち台地中央に走る道路と，南縁道路との間約70mが今回の調査範囲に含まれるものと考えられた。

ここからの展望は大きく，北には八ケ岳，南アルプスを背に甲府盆地が広がり，足下には笛吹川が曾根丘陵に沿って緩かに流れている。丘陵までの間にはわずかな耕地があり，大塚，伊勢塚の大古墳を頂上に置く大塚台地（315m）が細く北東に延び，沢をはさんで上野原台地となる。北東には山梨市塩山市の町並が遠く，手前には曾根丘陵の起伏がベランダ状に続いている。

遺跡は地元民の間では広く知れており，かって敷石住居や炉跡，埋甕等が発見されたのは前述の通りであるが，昭和47年春に工事計画変更に伴って分布調査を実施した際発見されたもので，この時の結果では，台地上部では縄文時代中期の土器破片が多数散布しており，僅に土師器，須恵器片が見ら

れたが，南縁部は比較的後者が多く，それなりに期待がもてた。 また，発掘地点北東のブドウ畑には僅に外れて円墳が存在している。 直径3m，高さ5～60㎝位で墳頂に石祠を置いている。このことから， かって小円墳が群集していたことを推察できる。古くは「甲斐国志」[7]にも，この近郊の古墳について記載があり， 昭和10年7月「史跡名勝天然記念物報告第八輯」[8]にも詳しい。また，鳥居原孤塚出土の赤鳥元年鏡[9]や付近から発見された蕨手刀[10]等の重要な遺物が発見されており， 大塚小学校にある三珠考古館（41年2月竣立）には縄文，弥生，古墳，歴史時代遺物が多く収蔵され， この地域を知る重要な手懸を与えてくれる。

この調査は昭和47年11月2日より13日の12日間行ない次の組織によった。

調　査　組　織

調査委員	井出　佐重（山梨県遺跡調査団団長）
事　務　局	鈴木　孝三（県社会教育課長）
	望月　恵夫（〃　　補佐）
	波木井市郎（県社会教育課文化財係長）
調査担当者	山本寿々雄（日本考古学協会員，山梨県遺跡調査団常任幹事）
調　査　員	末木　　健（県社会教育課文化財主事）
	竹石健二（日本大学講師）　高橋政敏（独教大学職員）　門司政広（日本大学助手）
調査補助員	岡崎完樹，三浦和信，伊藤恒彦，浦野保範，古峰孝夫，宮崎隆協，茅野俊彦，金箱文夫，天野晃四郎，佐藤正，山路恭之助，藤巻正信，藤本博樹，岡島知久，加藤直人，油井良江，藤井真紀子，江畑玲子（日本大学学生，順不同）
協　力　員	小沢佳恵，長田ゆき子（山梨英和高校）
調査協力団体	西八代教育事務所，峡南土地改良事務所，三珠町教育委員会

（註）

1　東八代郡一宮町国分――甲斐国分寺，一宮町東原――甲斐国分尼寺

2　東八代郡中道町下曾根――銚子塚古墳附丸山塚古墳

3　「甲斐国国分寺周辺緊落址の調査（予報）――末木両木神社付近の場合――」1972．3．山本寿々雄，山梨県教育委員会発行

4　建設省甲府工事々務所によって，石和町四日市場から勝沼町柏尾まで，国道20号線のバイパスが建設される。46年度より着工。昭和47年3月～5月に御坂町黒頭遺跡発掘，47年11月に石和町仲川字赤井で古代条里遺構の発掘がされた。本年度報告予定

5　県企業局が建設する右左口精進湖間有料道路による緊急発掘調査で，青山学院大学教授吉田章一郎，助教授田村晃一，郷土史家上野晴朗各氏により昭和46年3月第1次4月より第2次調査を行ない，縄文時代中期の集落跡が発掘された。48年度発行予定

6　山梨県地質誌　昭和45年3月　山梨県

7　文化11年　松平定能

8　仁科義男「古墳群の調査　第二編」

9　赤鳥元年五月二十五日の在銘があり，他に内行花文鏡一面，滑石製臼玉一個，須恵器若干が明治27年発見され，現在市川大門町高田浅間神社所蔵となっている。

○後藤守一

○「山梨の考古学」（山本寿々雄1968）

10　東京博物館蔵，長さ50.5㎝鉄製。

2. 調 査 概 要（日誌）

11．2 （晴）午前10時30分発掘現場に於て鍬入式を行なう。 出席者，山梨県遺跡調査団長井出佐重，三珠町教育委員会教育長堀口勝，社会教育主事三上邦秀，文化財審議員長渡辺修克， 峡南土地改良事務所県営課長小笠原力雄，他１名， 西八代教育事務所長小林忠治，社会教育主事福田寅男，県社会教育課課長補佐望月恵夫，文化財係長波木井市郎， 文化財主事森和敏，同主事末木健，日大文理学部学生７名，他土地所有者

この後地上物件を撤去し，グリッドの設定に入る。作業終了４時30分

11．3 （雨）作業休止

11．4 （曇）道路の方向に沿って65ｍを５ｍづつに区切り， 直角方向に左右５ｍとり，５ｍグリッドをつくった。西側より１～13の数字を，直角方向北側からＡＢＣとして， 計26のグリッドを設定した。 着手グリッドは５×５ｍのうち２×５ｍのトレンチ掘りとし，Ａ.2．3．4．5．6．7．13． B5．12の表土剝ぎを行なう。

11．5 （晴）新たにA9．10．11．12． B8．9．10．11 グリッドを掘り下げた。各グリッドとも深く攪乱を受けており，赤褐色土（ソフトローム土）にはゴボウか桑による攪乱溝がN50°Ｅ方向に走っており，その深さは約１ｍにもなるものがある。

11．6 （曇り後雨）昨日の作業を続行するが， 午後３時頃雨のため作業休止

11．7 （晴）Ｂ２Ｔを約40cm掘り下げたところトレンチ北側で， 赤褐色土が斜めに切られ暗褐色土が南側を埋めていたので， 住居跡の可能性を考え，まず覆土を掘り下げた。トレンチ南壁下約55cmで床面と思われる踏み固められた面が発見されたのでこれを追って掘る。 床面は部分的である。

11．8 （曇）Ｂ１Ｔ発掘，Ｂ２でプランはＢ１にまでかかっていない。

Ａ８Ｔのローム層を掘り込んで巨石が発見され， 周囲には所々ローム面が床面様であったのでＡ９Ｋを発掘したが南西部に巨石が存在したのみで他は攪乱を受けていた。

11．9 （晴） Ｂ２Ｔとの間にセクションベルトを残しＢ１Ｋを掘り下げた結果Ｂ２竪穴のプランが検出されたので， これを１号竪穴とする。遺物は少なく焼土が発見されていないので単に竪穴遺構とし， Ｃ１Ｋ，Ｃ２Ｋを設定した。遺物は縄文，土師片である。

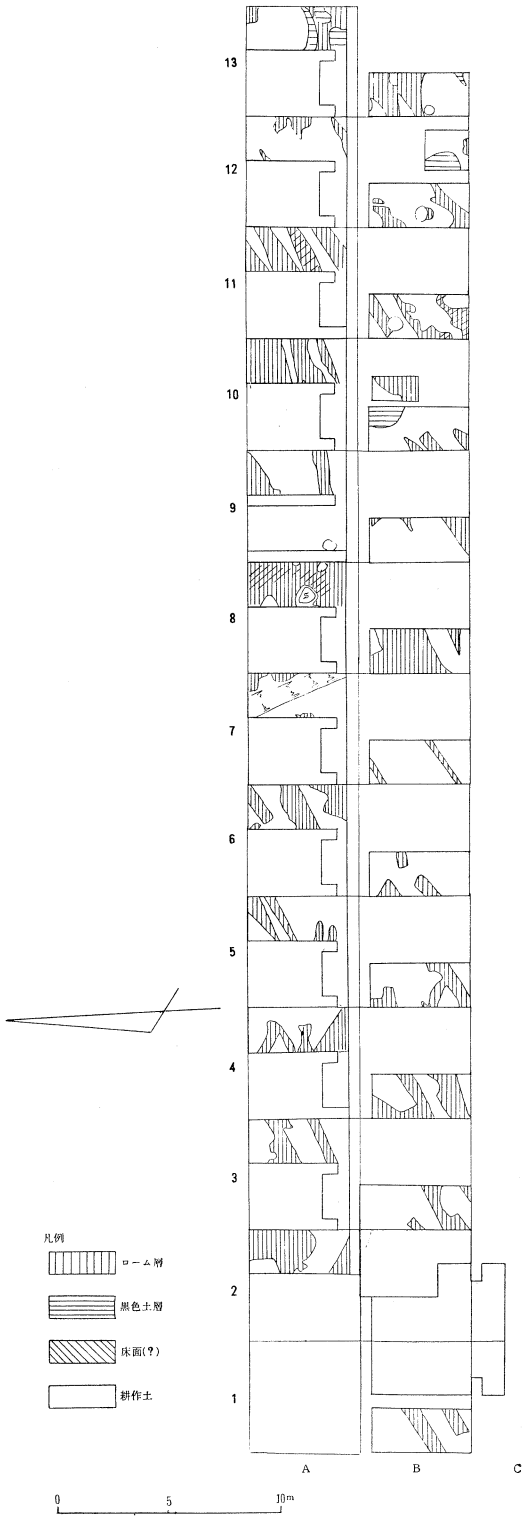
Ｂ10Ｔより攪乱層から須恵器甕破片を主として多量に出土したので， これのセクション（東壁）を実測する。

11．10（雨） ９時より10時まで作業の後雨のため休止

11．11（晴） １号竪穴のセクションＡ.Ｂを実測し，ベルトをはずす。又，道路方向に65ｍのセクショントレンチを設定し，南北トレンチを4.11に２本設定する。

11．12（晴）東西， 南北セクションの実測を行ない，１号竪穴の平板測量を行なって床面攪乱層の掘り下げを行なう。

11．13（晴） １号竪穴のエレベーションをとり全作業を終了する。



第2図　グリッド全体図

3. 発 掘 概 要

グリッド（第２図）

路線中心杭ＢＣ３とＮＯ６を中心に東西65ｍ，南北５ｍづつ区切り５ｍ×５ｍグリッドを26設定し，うち２ｍ×５ｍ南北方向に区画してトレンチを設定した。東西方向を西から１～13，中心から北をＡ，南をＢとし，グリッドをＡＩＧ，ＢＩＧ，と呼ぶ，又２ｍ×５ｍのトレンチを例えばＡＩＴとし，残部３ｍ×５ｍをＡＩＫとした。Ｔはトレンチの略で，Ｋは拡張区である。工区の関係でＡＩＧは現道がある為発掘しなかった。

第２図はソフトローム層上面で記録したものであるが，攪乱溝がN50°Eの方向で落ち込み，その間にも無数の攪乱ピットがアバタ状にある。攪乱層はローム粒子，ブロック混入暗褐色土で遺物が含まれているが，ほとんど細片となっている。

Ａ２Ｔ～Ａ７Ｔ，上記の攪乱によりローム面が耕作を受け遺構が発見されなかった。Ａ７Ｔは丁度桑畑と桃園の地境であり，南北に走る溝が掘られていた。溝中より須恵器破片（第６図３．４）礫が数個出土した。

Ａ８Ｔ　ソフトローム面まで比較的浅く約40㎝である。トレンチ北西偶に地表から掘り込まれたと見える礫群が存在し，礫群は径１ｍ位で礫は角礫が多く，礫の大きさは平均して直径10～15㎝位のものである。石は火を受けておらず，周囲はロームが床面様であったのでＡ８Ｋにセクションベルトを残し発掘する。

Ａ８Ｋは攪乱が深く床面と考えられる部分は発見できなかったが，Ａ８Ｔ内から発見された巨石２個と同一方向上に巨石が発掘された。（図版４の１）

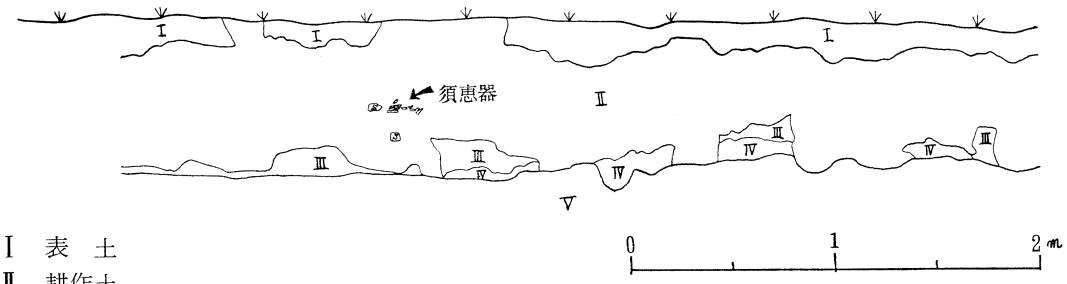
Ａ８～13Ｔ　いずれも攪乱を深く受けており遺物も破片であった。A11Tはローム上面で攪乱を受けていない部分が帯状に床面的面を残していたが，セクション，遺物出土状況から遺構の追求は不可能であった。A13Tはローム面までが残く北側攪乱層より須恵器破片（第６図1．2）縄文破片が混在して発掘された。

ＢＩＴ　地表下30㎝でソフトローム面を切り込んで攪乱溝がある。

Ｂ２Ｔ　竪穴遺構が発掘されたので遺構の項で説明する（第４図，図版２の1．2，図版３の１）

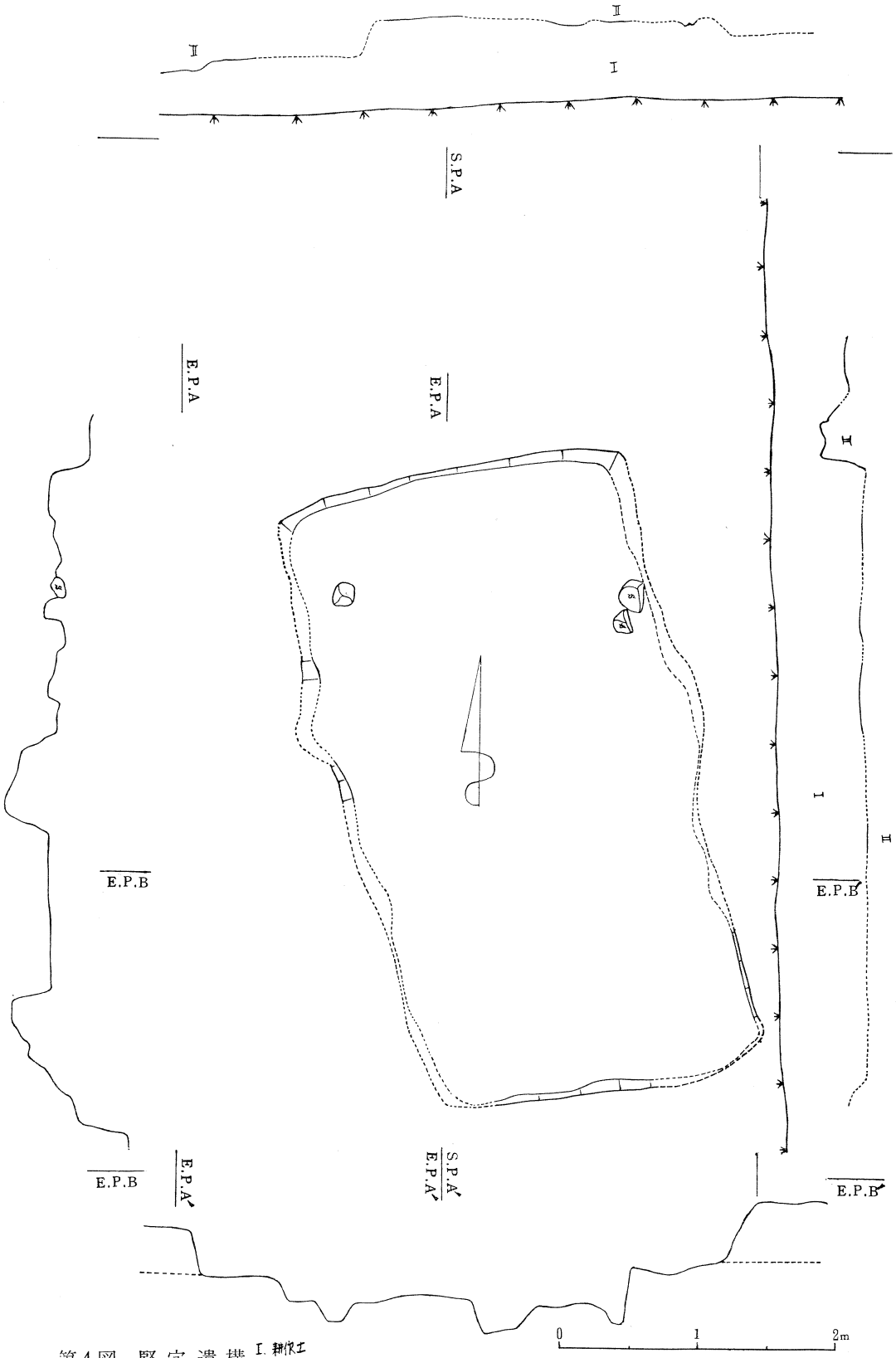
Ｂ３Ｔ～Ｂ９Ｔ　攪乱により遺構は発見されなかった。

B10T（第３図，図版第３の２）トレンチ北側で須恵器甕破片他があたかも捨てられた様な状態で



第３図　B10Tセクション

Ⅰ　表　土
Ⅱ　耕作土
Ⅲ　黒褐色土
Ⅳ　ソフトローム層
Ⅴ　ローム層



第4図　竪穴遺構 Ⅰ. 耕作土 Ⅱ. ソフトローム層

攪乱層から出土したので，B10Kを1.1m×2.1m掘り下げたが，遺構と認められず，セクションから見ると溝上部から出土しているのが明確になる。表土は部分的に10～20cmあり攪乱層が地表となっている部分もある。表土は桃園のためか固くしまっており，攪乱層は比較的柔らかい。かってゴボウ，桑があったのであろう。また，ローム面が他のグリッドと同様に攪乱を受けており，ソフトローム層はわづかである。

B11T　ここでも攪乱溝が4本あり，南側ローム面が床面様で固いが住居跡には不充分であった（第2図）。また床面様部分には縄文中期土器片が2片踏み込まれていた。

B12T　攪乱により遺構はない。B12K，黒褐色土が覆土となっている小竪穴が存在したが，土は柔らかく遺物もなかった。

B13T　表土が浅く20～30cmでソフトローム層となる。ソフトローム層は南に緩かに落ちている。

竪穴遺構（第4図，図版第2の1.2.第3の1）

B2Tの発掘中南側が暗褐色土層で落ち込んでおり，攪乱によるものと当初考察したがトレンチ南壁下55cmのところで床面が見られたので，これを追う。北壁は中心杭より南へ約1mのところにあり，この間の床面は部分的であるが，ほぼ同一レベル上にある。

そこで，B1Tを掘り下げたがプランは確認されず，B1K，のセクションベルトを残し掘り下げたところコーナが把握できた。従って，B2K（1.5m×1.5m）C1K（1.5m×2.4m）C2K（3.5m×1.5m）を発掘し，竪穴遺構のセクション実測及び平板実測を行なった。

竪穴の各辺の長さは4.5m（東）2.55m（北）2.4m（南）4.5m（西）で長方形を呈し，長辺の方位はほ南北にある。壁高は各辺の中央で18.5cm（東）27.5cm（北）14.5cm（南）25cm（西）である。また東壁に接して北側から約1.1mのところに円礫があり並んで15cm位の礫が存在する。当初この石組を竈と考えていたが，礫は焼けておらず，焼土が無かったことで住居跡と考えることができなかった。

この竪穴は他のグリッド同様攪乱をはなはだしく受けており，壁で把握されたのは北壁，東壁南側一部，南壁中央部，西壁北側一部である。床面は前述した通り柱穴も判定できない有様であった。攪乱ピットの深さは不統一で，遺物も土師片，縄文土器片の細片であった。

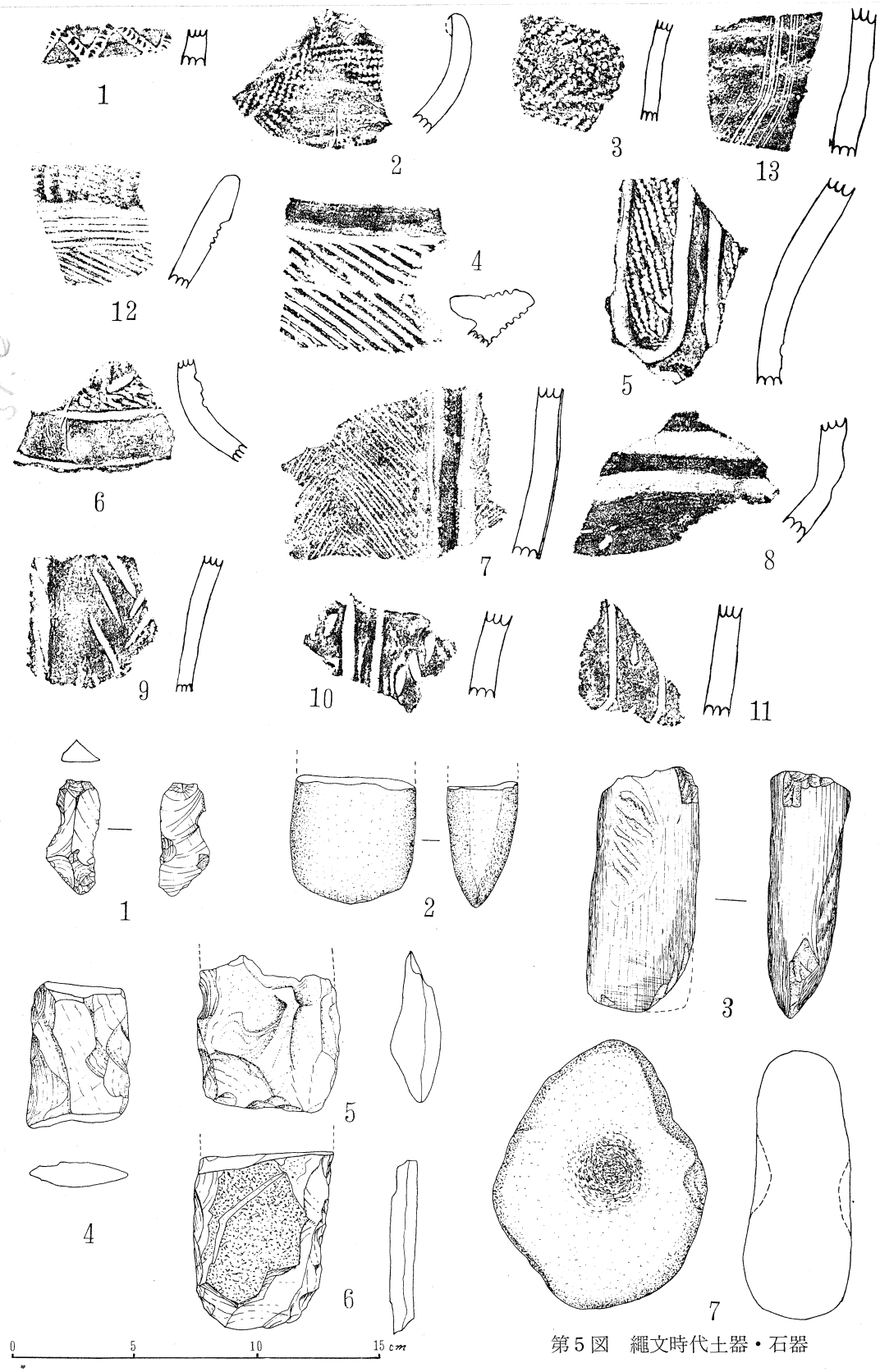
4. 遺　　物

三珠町上野原遺跡の遺物は縄文時代と古墳時代以降のものに分けることができる。遺物量からすれば須恵器が最も多く，次いで縄文土器片，それに土師器片が続く。他に灰釉土器底部1片，縄文時代石器7点で，およそミカンダンボール2箱になる。しかしこれら資料が，総て攪乱層内から出土したのであって，遺構内から層位的に，あるいは一括土器として取り上げた遺物でないが故に，その価値は半減していると言っても過言ではない。従って，勝手ながら重要と思われる遺物を第5図第6図に取りあげた。

縄文時代（第5図）（図版5）

ここでは前期末葉から中期，後期に渡って土器を見ることができるが，前期の土器片は少ない。又中期でも後半の土器片が多く，曾利式に近いものであろう。

1　半截竹管連続刺突文を特張とする土器で，山形に施文するのを多く知らないが繊維を含まず、焼成は良好で固く，赤褐色の色調を持っている土器である。諸磯式に相当する。



第５図　縄文時代土器・石器

2.3. 粗雑な縄文を施文したもので，方向も一定ではない。羽状縄文でもなく，繊維をも含まないで焼成もあまく器面はザラザラしている。2は3に比較して焼成も良く， 色調は黄褐色で，4つの頂点を持つ波形口辺の1突起部で外傾しているが， 口縁部は内側に折り曲げられている。諸磯a式として良いだろう。

4. 曾利Ⅱ式の特長とする屈折した口辺に平行沈線を深く斜めに施文した厚い土器で， 黒褐色焼成は比較的良い。

5. 6 沈線で縄文帯と無文帯を区画したもので色調は黄褐色， 焼成は良好である。曾利期中頃のものと考えられる。

7. 隆線の両側をヘラでこすり， この外側を細い条線（刷目文とでも言える様な）で斜めに施文している。 曾利前半期の胴部を縦に貫く様な力強い沈線が弱まり，斜条線となったものであろう。土器は比較的薄く，赤褐色を呈し焼成もそう良好ではない。

8. 浅鉢形土器の肩部と考えられる。太く浅い沈線2本で1本の半隆線を造り出している。

9.10. 八字文を特長とする中期末葉の土器で棒状ヘラで八字を施文している。9は浅く10は深い刺突文に近い沈線である。 又，10は沈線2本で口辺からの懸垂文を表現しているところから中期最終末の土器であろう。

11. 沈線と刺突文による施文で比較的薄く，褐色で胎土，焼成は普通である。一片で不明確であるが後期初頭のものと考えて良いだろう。

12. 外傾している口辺部に三角（丸に近い）連続刺突文を施し，この下部を5本の平行沈線を引き，次に右下りの条線を施文している。 口縁部文様施文具と下の用具とは恐らく同じものであろう。この土器の位置は明確でないが， 北陸地方の後期初頭に当るものではないだろうか。

13. 細い条線で施文され，他は無文である。焼成良く，胎土も良好である。

石器（第5図）（図版6）

この遺跡からの石器の出土量は少なく， 攪乱層から総てが出土しているのは土器と同様である。全部で7点の石器が出土しており， 不定形石器1，磨製石斧2，打製石斧3，凹石1である。石材は黒曜石， 粘板岩，安山岩系岩石，硬質砂岩である。黒曜石片は少なく，皆剝片又はチップと言われるものである。

1. A7Tから出土した黒曜石製不定形石器である。 表裏とも左側縁に片面のみリタッチが加えられその周囲に使用痕がある。裏面から見るとバルブを持つS字形の1次剝離面を観察することができる。縦4.7cm

2. A4Tから出土した定角磨製石斧で基部を欠損している。 刃部は使用による潰痕があるが，良好に磨かれている。角閃安山岩製，刃巾5cm，欠損部厚さ2.9cmである。

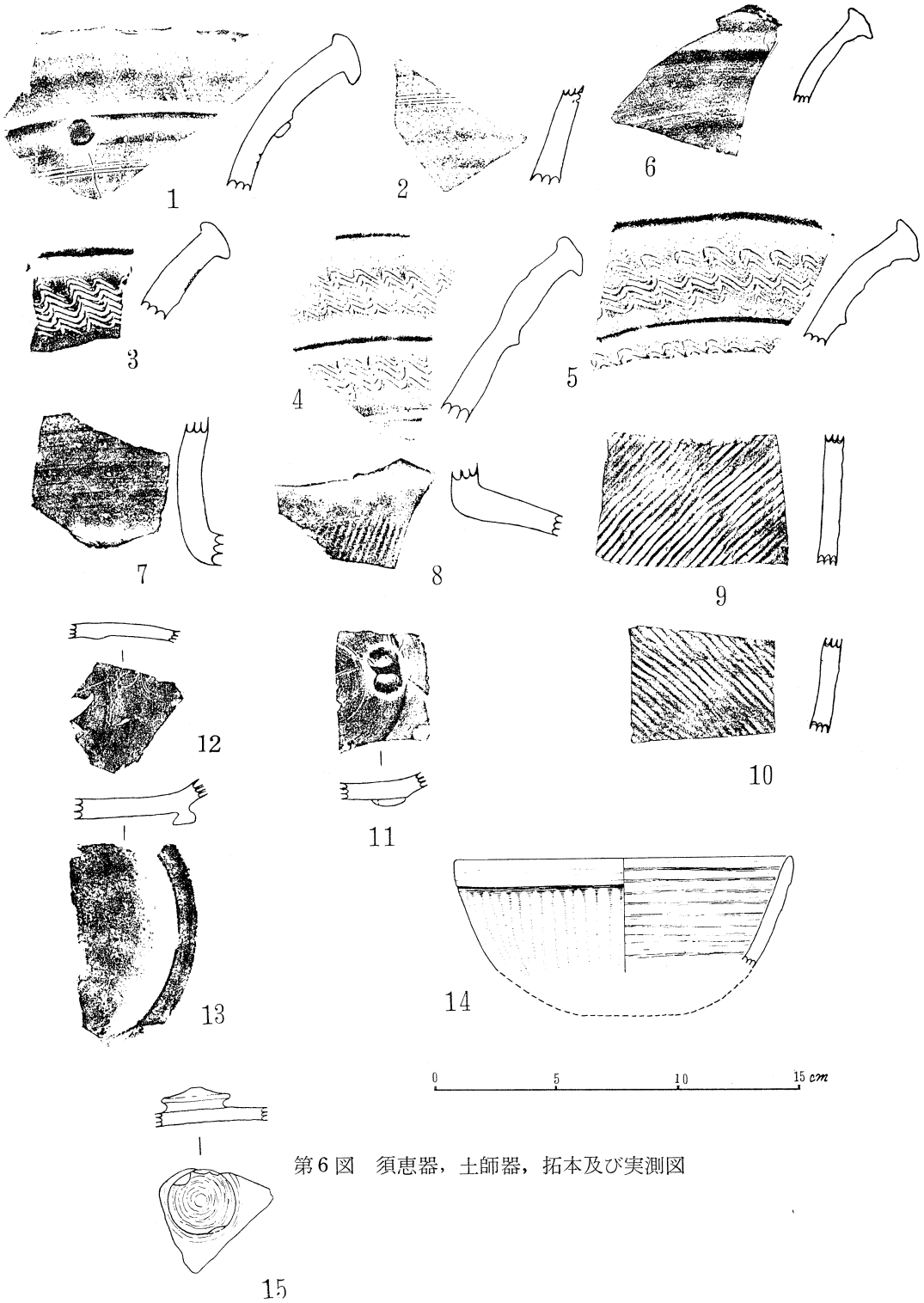
3. A6Tから出土した特長ある磨製石斧で， 基部を欠損しているが，両面に着柄用の打面がある。刃部片側に多く使用痕を残しているので刀の切先に以ており， 左縁は嶺の様である。刃部擦痕は整形時のものが刀縁に直角で， 使用痕が平行に残されている。刃巾は推定4，5cm（現3cm）で長さ10cmである。石材は硬質砂岩。

4. A7Tから出土した短冊形打製石斧破片で， 基部，刃部とも欠損している。粘板岩製で薄く幅4.1cmである

5. B11Tから出土した短冊形打製石斧破片で，基部欠損し，刃部幅5cm，安山岩製で厚い。

6.　A6Tから出土した短冊形打製石斧で，基部が欠損しており，刃部一部が破損している。幅5cmで粘板岩製である。

7　B7Tから出土した凹石で輝石安山岩で造られている。凹部は両面にあり，敲打法により整形されている。



第6図　須恵器，土師器，拓本及び実測図

須恵器（第6図，図版7）

最も多量に出土したが，器形は甕の破片がほとんどであった。

1.2　A12T北側攪乱層より出土した甕の口辺で9本の歯をもつ櫛状具で1㎝間隔に刺突している。上下の刺突文を断面三角形の隆線で区画し，ボタン状貼付文を配している。下の刺突文を横切って口辺に平行に2本の沈線が引かれている。1.2は同一個体と考えられ，胎土は固くロクロ整形痕が残る。

3.4.5　3.4はA7T，5はA4T攪乱層から出土した甕の口辺で同一個体と考えられる。三角隆線で区画された上部文様帯は3.4本の歯で施文された波形櫛目文で，重複している部分があるので数度に渡り施文したものであろう。

6.　B10Tから出土した甕口辺でロクロ整形痕が明瞭に残っている。

7.8　B10Tから出土した甕頸部でロクロ整形痕が残っている。8も同様で頸部から肩部への破片で表面に敲目が残っている。

9.10　9はB12T，10はA12Tからの出土で2つとも甕胴部破片である。裏面は青海文を擦消している。破片のカーブが比較的ゆるい為，相当の大甕と考えられる。

灰　釉

11.　A11Tから出土した底部破片で皿であろう。胎土は白く，内側に釉がかかっている。底部にはロクロ痕があり，指で貼付けたボタン状の脚がある。

土師器

12.　A12Tから出土した土師杯の蓋で外側はヘラで良く磨かれ，内側にはロクロ整形痕の上に，陰刻の細い線で馬の後足と尻尾が躍動的に描かれている。赤褐色で胎土，焼成も良好である。

13.　B10Gから出土した台付皿底部破片であろう。台部は皿部からひねり出された様に接合部がくびれている。色調は褐色であるが，台外側のみ赤くなっている。ロクロ整形で底部内面ともその痕を残している。

14.　A3Tから出土した杯破片を図上復原した。口辺外側はヘラ横なでで，光沢がある程磨かれている。この下に沈線が一本走り，この下は横なでされたあと，ヘラで縦方向に整形痕がある。内側は横なでの荒い整形後，ヘラで磨かれている。赤褐色で胎土焼成とも良好である。

15.　A11Tから出土した蓋破片で撮部にもロクロ整形痕を残し，蓋との間は2.3㎜程くびれている。焼成，胎土とも良好で，赤褐色である。

5. ま と め

笛吹川左岸の東山梨，東八代，西八代郡下は県下で最も多密な遺跡包蔵地帯であり，歴史の豊かな町々が並んでいる。しかし耕地が山裾まで広がり江戸末以降の開墾により，ほとんどの遺跡が大小の破壊を受け，記録や報告も無く歴史の源泉を断たれてしまっている現状である。

徒って今日甲斐の古代史を構成している資料は断片的で部分的なものでしかなく，一片の土器を石器をも疎かにすることが出来ないのも明白である。同様な遺跡は文化の広がりを把握することも出来るし，小さな遺跡はそれなりに重要なキャンプだったに相異ない。また土器一片でも北陸地方，東海地方，関東地方などとの交流を知り，人々の足跡を実証する証言ともなる。

昭和47年11月2日から13日の間行なわれたこの発掘では竪穴遺構と土器破片，石器等が耕作による

攪乱層の中から出土したので，層位的に年代を把握するかと，遺構との相関関係を明確にすることは出来なかったが，遺物そのものから貴重なものが出土している。その筆頭が馬の刻線画を持つ土師器片で，整形痕から器形を推定するに杯の蓋であろう。刻線画は内面に彫られ，後足と尻尾が天馬の様な躍動感に溢れている。これに彫られた意味を知ることはできないが，単なる戯画として片付けることはできないであろう。絵画が願望の表現であるなら，上野原遺跡の古代人が駿足の名馬を描いたものとも考え得る。馬は古墳時代中期に，大陸文化の波及により人々の生活に浸透したものであるが，縄文，弥生時代の貝塚から骨や歯が出土することから大陸からもたらされものではない事が分るが，家畜化されされたのは古墳時代以降であっただろう。徒って馬の需要が増加した奈良平安時代の人々の要求の表現と考えられる。

須恵器については，甕の破片がほとんどで，口辺の破片は概して口径の大きなものが多く，頸部に文様を持つものとロクロ整形痕のものに大別できる。口唇部が丸く脹むところから7世紀前半と推定され，又，胴部片等については，表に敲目があり，内側には同心円文が残されているが，円心円文は整形されうすくなっていて同時期あるいは若干新らしいものと観察される。

縄文時代遺物については，地域編年で言うなら前期諸磯式，中期曽利式，後期大花，気屋式等が見られ，特に（第5図12）の北陸地方の影響を受けたかあるいは移入品と思われる土器片が興味深い。

石器については石鏃を除いた磨製石斧，打製石斧凹石が出さしているが，どれも破損している。
また山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告第八輯にも付近出土遺物が載っている。

なお，この調査地区西側は48年度以降に工事予定があり，これ以上の面積が調査対象になるので，第2次調査によりこの報告書を生かしてゆきたい。

文末ではあるが，この調査に協力していただいた三珠町役場職員及び峡南土地改良事務所諸氏，県耕地課職員皆様に感謝申し上げます。　（文責　末木）

県営畑地帯土地総合改良事業関係豊富村中木原
櫛形町中野遺跡試掘調査結果について

この土地改良事業は，甲府盆地を挟んだ東の曾根丘陵と西の市之瀬台地で現在進行されている。東の豊富村は，曾根丘陵の南西に位置し，標高342mの王塚を頂にもつなだらかな丘が目印となる。西の櫛形町中野は標高400m余で平担な地表面をもち，盆地にのぞむ東縁は高さ50～100mの高度差をもつ断層崖をなしている。また西方山地と接する部分も，断層によって境されている。台地縁から東を流れる漆川に挟まれた斜面には古墳が数基残り，台地上中央の中野部落東に昭和37年度分布調査で台帳にのせられた中野遺跡がある。今回の調査は，部落と中野遺跡の中間に新設される幹線道路内の２ケ所（２m×２m）を２m掘り下げて土層の調査を行なった。また豊富村中木原地区は，王塚の宇山平から一段下った標高約300mの場所で，台地が浅い谷で馬の背状になっている地区である。この北側縁に幹線２号が現道拡幅して建設されるので，路線内に３ケ所（１m×２m）を約１m掘り下げて土層及び遺構確認の調査を行なった。

幹線道路は全巾5.０m有効巾員4.７mのアスファルト・コンクリート舗装道路となり，支線道路は全巾4.５m，有効巾員4.２mとなっている。豊富村では46年度より１号幹線等が着手されており，中野地区は47年度からである。この幹線，支線道路は地域で綱の目の様に建設されるので，特に豊富村については埋蔵文化財の保護基本構想が早急に要求されている。

さて，それではそれぞれの地区について調査結果を簡単に説明しておこう。なお調査は48年１月22日・23日，２月１日に行なった。

（中野地区）

1．北沢川左岸に1.５㎡×1.５m×1.５mの試験掘溝を設定した。櫛形町中野字葉木原1,360番地である。表土30cmで砂粒混入暗褐色土，地山120cm，腐触を受けた山礫混入茶褐色土である。市之瀬川，北沢川によって運ばれた土層と考えられ，遺物は皆無であった。

2．中野字南新居2129番地の桃畑内で，2m×2m×1.3mを設定し，土層観察をした。表土は１と同様であるが桃の植換え等により第２層（小礫混入黄褐色粘土層）表面はカットが見られる。表土60～100cm第２層70cm～30cm，第３層黄褐色砂礫層であった。

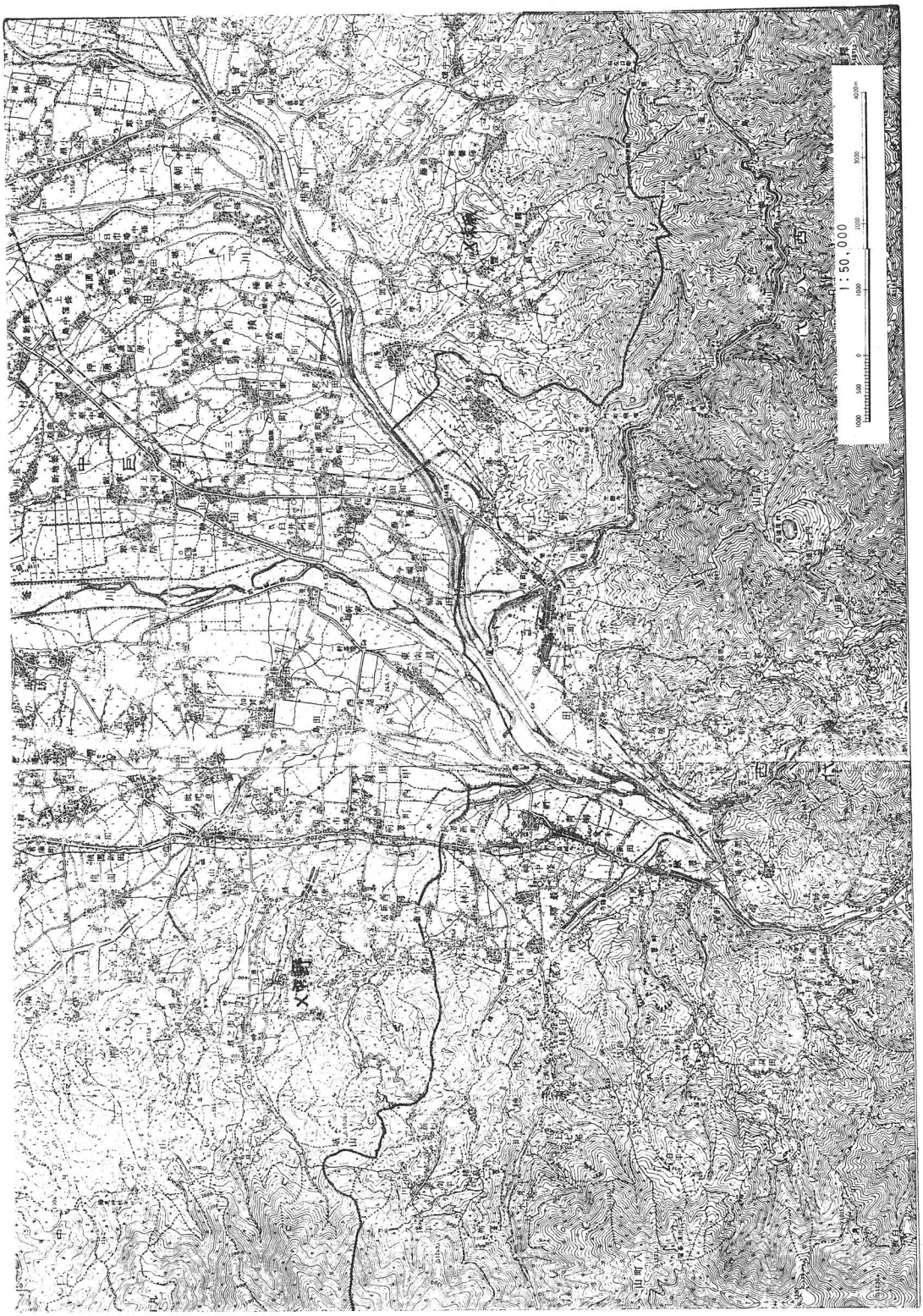
（豊富地区）

1．中木原部落より約86m入った左側拡幅部に設定した１m×２m×1.1mの試掘溝を掘った。表土は1.1mが暗褐色粘土層で柔らかく遺物が含まれる層であるが，少量である。
第２層は粘土化灰白色浮石帯で，豊富パミス上層の風化した層ではないかと考え得る。従って，この地区は浅い谷によりローム層が削り取られてしまったと思える。

2．道路を挟んで１の反対側に設定した。土層は１と同じであり，遺物（縄文中期中葉）は土器片が10片程，第１層下部より出土している。

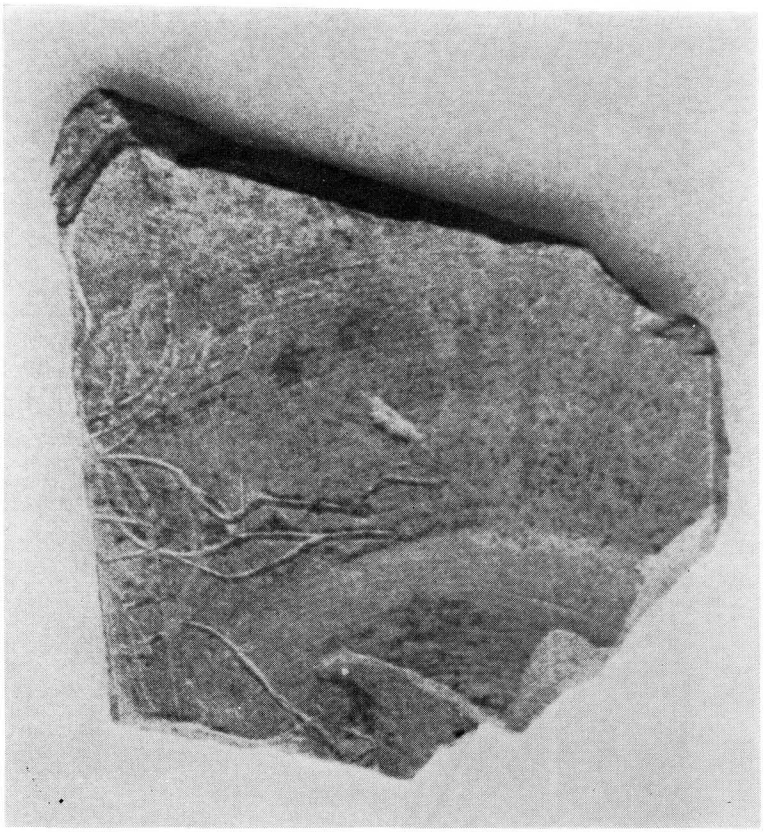
3．1.2と異なり，第１層表土は耕作土であるが暗褐土で粘土的ではない。第2層はローム層である。表土40cm，遺物はない。

文末ではあるが，この調査には県耕地課県営係長長三技正庸氏，技師菊池紀邦氏，峡中土地改良事務所諸氏，峡東土地改良事務所諸氏のご協力により，県文化財主事末木健が調査を行なった。



第7図　遺跡位置図

図　　版



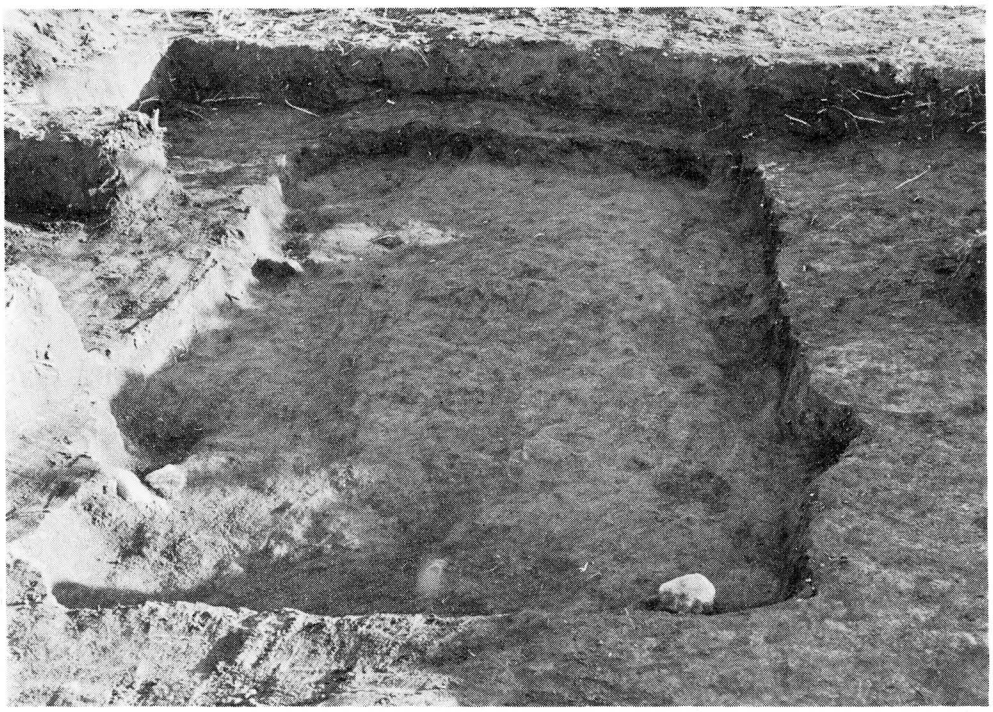
（第５図　12　土師器蓋内側の刻線画）

図版 I

遺　跡　全　景

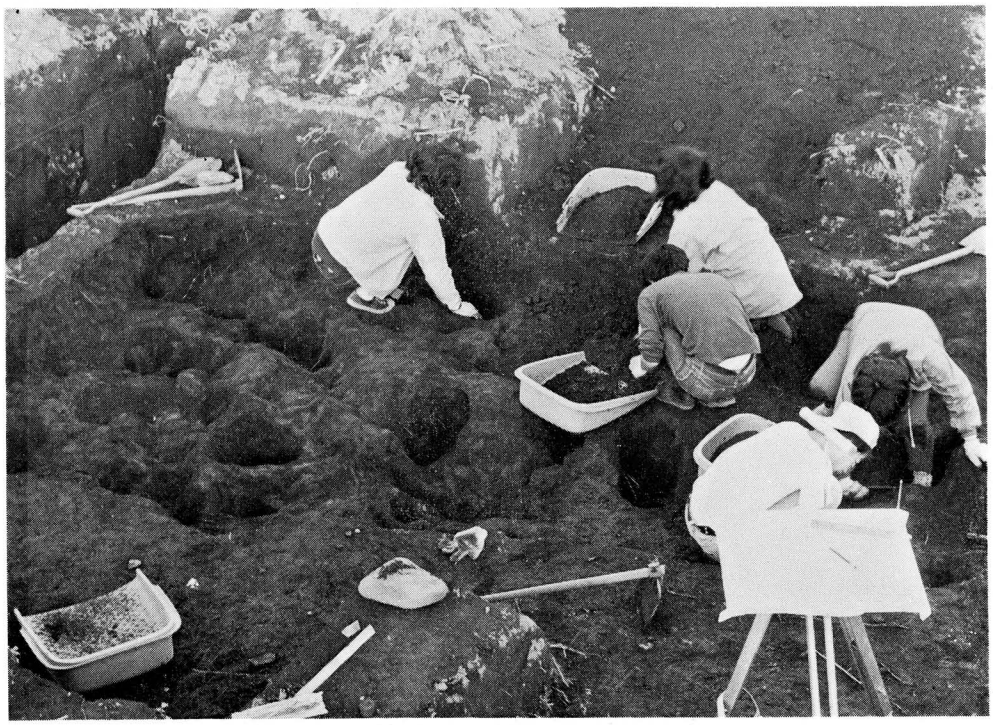
図版 2

1. 竪穴セクション（南側から北）



2. 竪 穴 全 景（北から南）

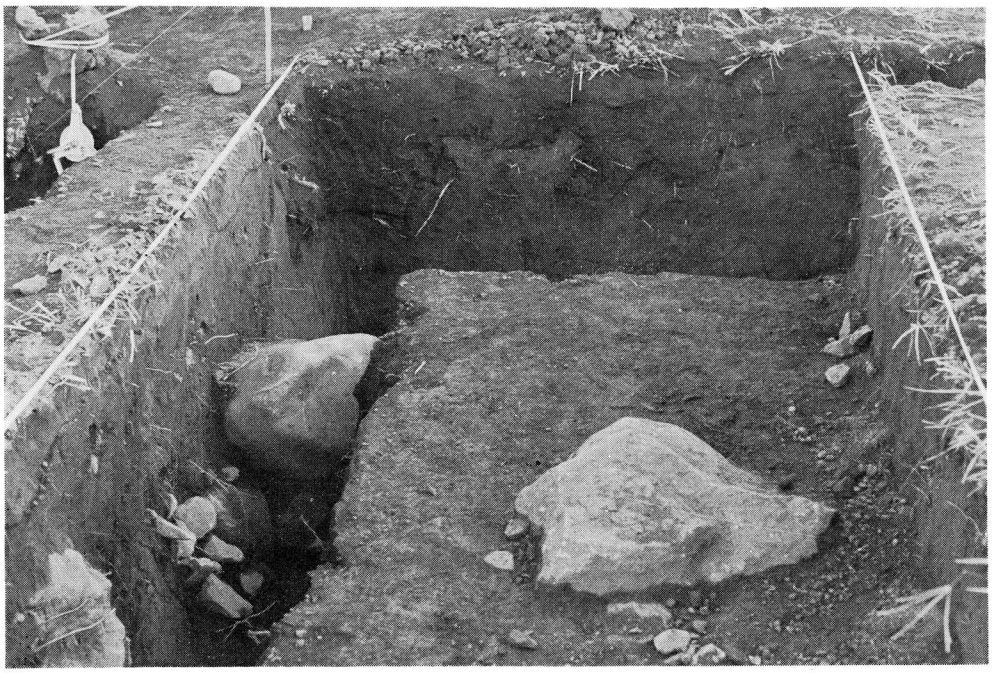
図版 3



1. 竪穴床面攪乱ピット発掘

2. B10Tセクションの須恵器

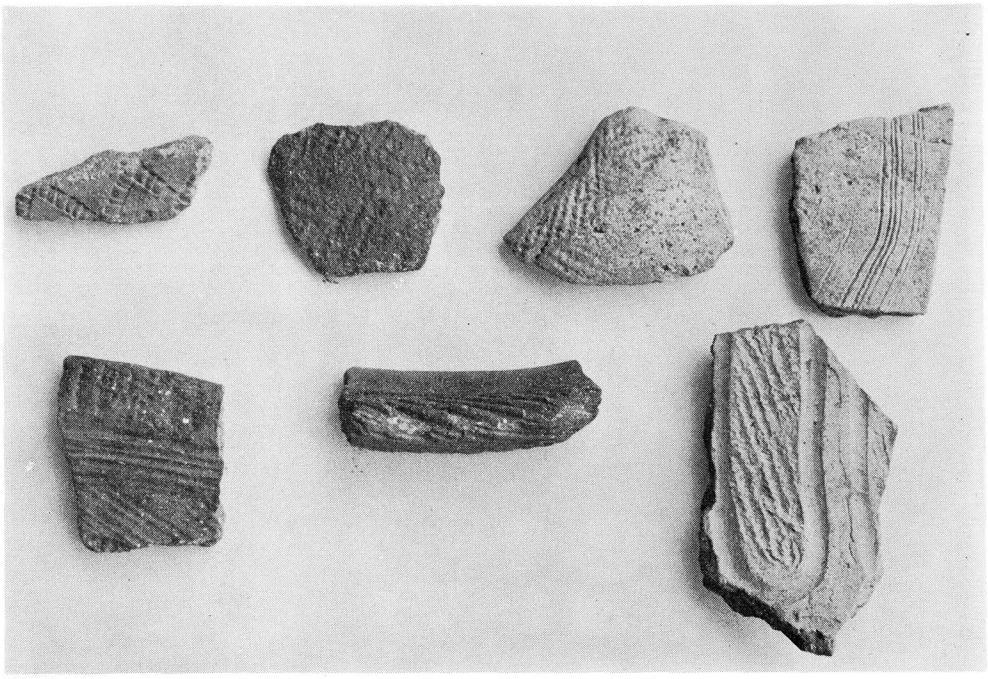
図版4



1. A 8 T 内の石組（北から南）

2. 東西セクショントレンチ（西から東）

図版 5 （縄文時代土器）



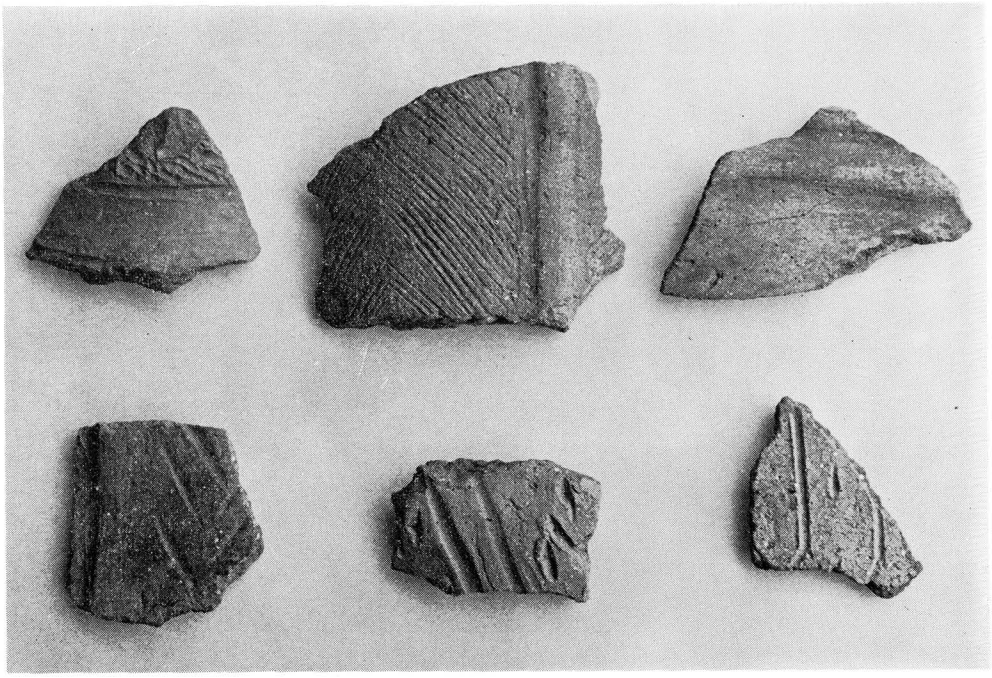
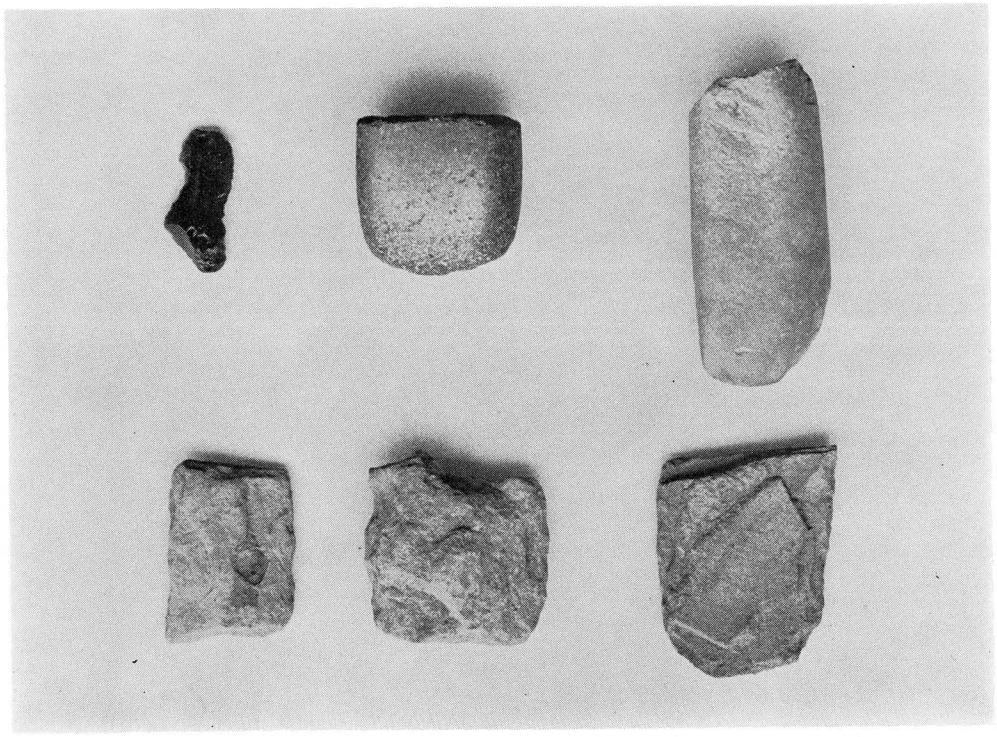
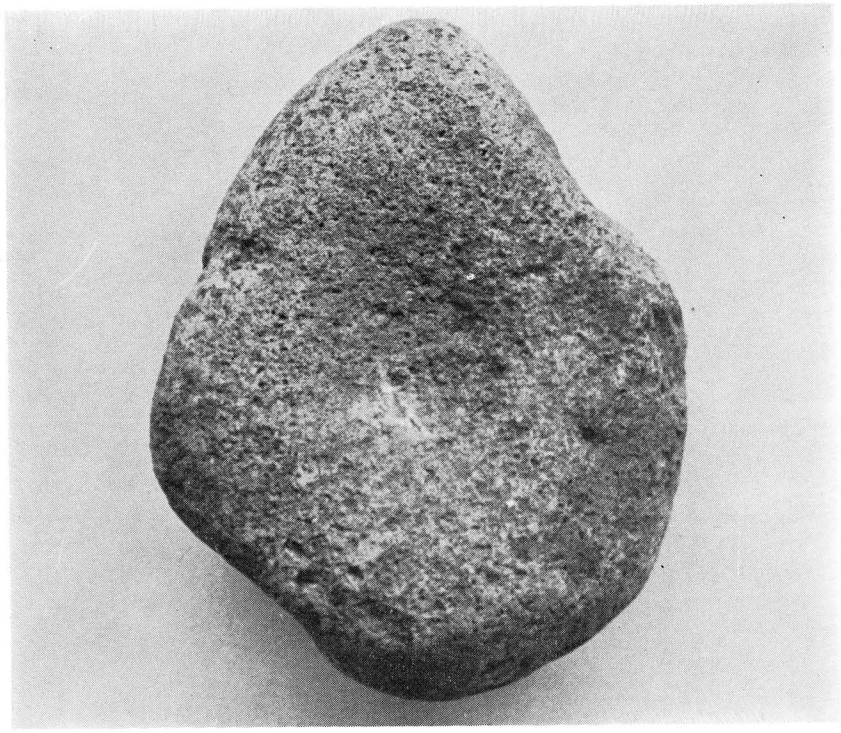


図 版 6　（縄文時代石器）

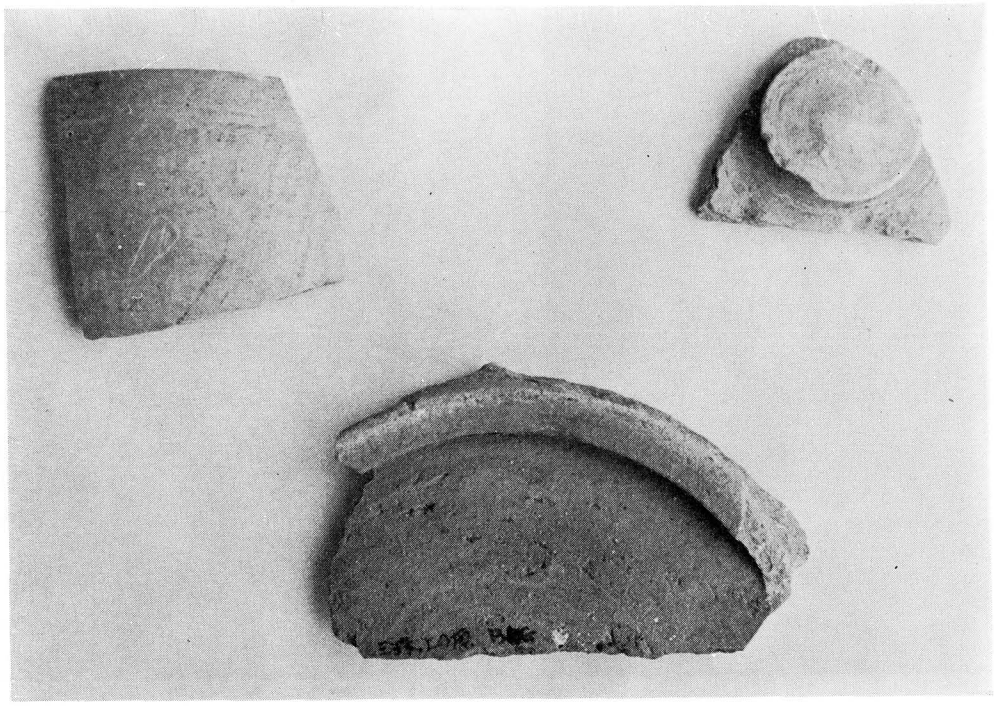


1.　不定形石器，磨製石斧，打製石斧



2.　凹　　石

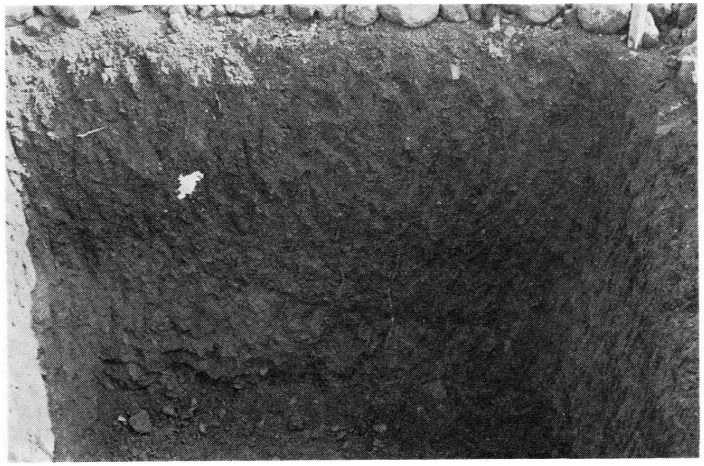
図 版 7 （須恵器，釉灰，土師器）



1. 中木原 No. 3

2. 中木原 No. 2

3. 中野 No. 1



4. 中野 No. 2

豊富村宇山平遺跡調査概報

目　　次

1.　遺跡の位置とその概況……21

2.　調　査　の　経　過……21

3.　遺　構　と　遺　物……21

（イ）　遺　　構……21

（ロ）　遺　　物……23

4.　お　わ　り　に……24

1. 遺跡の位置とその概況

本県における遺跡は，八ツ岳山麓・曾根丘陵・及び都留地方（郡内地方）の三区分に大別される。本遺跡はこの内，曾根丘陵に分布するものである。

曾根丘陵は甲府盆地の東側に連なる御坂山系の山麓が断層によって形成されたもので，ベンチ形を呈し俗に「蹴上り段丘」とも呼ばれる地形である。曾根丘陵をおりると笛吹川が流れ，その沖積層は甲府盆地の底部を成している。

この宇山平遺跡がある舌状台地には341.8mの三角点がある。この三角点は王塚古墳の上にあり，ここは甲府盆地を一望できる絶景の地である。北側には谷を隔てて米倉山が見え，南には「赤烏元年」鏡が出土した狐塚古墳をやはり谷を隔てて眺むことができる。（第一図，第二図参照）

宇山平遺跡は，王塚古墳から東へ約400mくだった位置で，小字宇山平1575番地・小字東林1417番地小字伊勢塚1570番地の付近一帯である。D区の近くには，竪穴式石室をもつ円墳「伊勢塚」がある。

曾根丘陵には，先土器・縄文・弥生・古墳の各時代の遺跡があり，特に縄文時代の遺跡は濃厚である。宇山平遺跡もこの全ての時代の遺物を今回の調査で発見した。（表面採集分も含む。）

2. 調 査 の 経 過

昭和46年11月中旬県社会教育課から発掘の依頼を受け，道路拡幅工事着工期日が12月10日との連絡だったので，急拠11月18日に県文化財調査員・上野晴朗氏，県社会教育課・宮川副主幹，志村豊富村教育長等と現地を視察した。更に11月25日夜豊富村役場で波木井県文化財係長等と共に，山梨郷土研究会考古部会員と豊富村郷土研究会員と発掘の打ち合わせ会を開催した。

11月28日午前10時から県文化財・工事関係者・地元・山梨大学生・山梨郷土研究会員等の出席のもとで井出山梨県遺跡調査団長のあいさつ，上野晴朗調査主任の説明が行なわれ，クイ打，測量，遺物の表面採集を開始した。この際，付近の畑でごぼうを堀っていた農夫が弥生式土器を発見し，調査団に連絡してきたので，見過ごすこともできずやむなく緊急発掘をすることとしてD区を設定した。（第三図参照）

この調査は両側に平均2mづつ道路を拡張するため，その拡張部の遺跡を確認することが主目的であった。よってトレンチを道路に沿ってA区に5号，B区に2号，C区に2号を設定した。

発掘実施期間は，昭和46（1971）年11月28日から47年1月16日のうち8日間で，その日時は，土・日曜日をできるだけ使い，昭和46年（1971）年11月28日，同29日，同年12月3日から6日まで，47年1月15日，同16日である。なおD区の発掘については山梨大学生が後日も多少続けた。

発掘期間の前半はA区とD区を，後半はB区とC区を重点的に調査したが，作業の都合上A区とD区をこれと平行して行なった所もある。

また，地形測量や遺構遺物の平板測量，写真撮影等はほとんど発掘作業と平行して実施した。

なお，遺物の写真撮影，拓本取りや測量図の墨入れ等は46年から47年にかけて随時夜間を中心として山梨大学教室などを借用して発掘作業参加者が行なった。

遺跡調査日誌や調査の2次的な経過については省略する。

3. 遺 構 と 遺 物

（イ）遺　構

最初に，確実に遺構と思われるものはなかったことを記しておきたい。

この道路拡張工事は両側へ平均約１mづつ広げただけであったこと，道路が両側の畑より約50cm低かったこと，畑との境の傾斜の部分が広がったので遺構が破壊されていたこと，更に，A—１号，D—１号トレンチでは，長芋が掘った際耕作によって遺構が破壊されていたことなどによって遺構が発見できなかったものと思われる。A—１号トレンチを入れた畑の所有者の話しによると，このトレンチより20～30m北に長さ50cm程度の石棒，土器や焼土を発見したという。他にも付近の畑を耕作して多くの遺物を発見したという。従って特にA区を中心とした地域にはかなり濃厚な縄文式時代の遺跡があると思われる。

B区は急な東北面傾斜であるため遺構はなく，遺物も土師器破片が少量出土しただけであった。

D区は比較的傾斜は緩慢であり，弥生式土器，土師破片もかなり地表に散布しているがこのトレンチを入れたのが野菜畑であったので，やはり地下１m位まで耕作されており遺構は発見できなかった。

次に遺構があったと思われるトレンチについて番号順に記してみたい。

１．A—１号トレンチとその拡張部

耕作土が深く，約１mであったがわずかに生活面—住居址床面の一部と思われる部分があり，攪乱された状態でこの周囲から，図版第10図・第15図のように加曾利E式土器及び後期に属する土器片とくぼみ石２個，黒曜石製品が出土した。これを掘り下げると更に生活面（住居址床面の一部か）が表われたが出土品はなかった。

A—１トレンチの西側拡張部は既設の道路であるが，ここからは使用不明の積石遺構（図版第２図）が表土下約20cmにあったが，これは歴史時代の遺構と思われる。豊富村に住む古老の話しによると，この田中盛衛氏の畑に武家屋敷があったというが，あるいは関連したものかもしれない。

２．A—４号トレンチ

道の両側は桑畑で，このトレンチの真北から傾斜が大きくなる。このトレンチ付近に限り，非常に耕作土が浅くわずか20cm程であり，その下はハードローム層になっている。他のトレンチは全て１m前後の耕作土や黒色土が堆積しているのに比較して非常に浅いのであるが，この理由はわからなかった。

A—４号トレンチは畑の中に設定したのであるが，落込み（後で畑の所有者に聞いたところ耕作によるもの）があったので道路側にトレンチを拡張した。その結果人的に置かれた石と掘りこまれた穴を発見した。（図版第４図・図版第２図の２）。しかしハードローム層直上からは，加曾利E式土器の破片が少量出土しただけでこの遺構の明確な時代設定もできなかった。

３．A—５号トレンチ

桑畑で急斜面であったが比較的遺物も多く出土した。

第二層から攪乱された状態で土師器・須恵器片が出土し，須恵器杯（図版第９図・図版第15図）が出土した。また第３層からは縄文時代後期，晩期土器片が攪乱された焼土を伴なって出土したが，ついに遺構らしきものは発見できなかった。この付近は，表土に多く縄文式土器・土師器が散布している。

４．D—１号トレチ

農夫が弥生式土器を発見した場所であったので特に慎重に発掘を進めたが，攪乱がひどく，ついに

遺構は発見できず，弥生式土器（図版第８図・図版第15図）一個が出土したのみであった。ここからも多量の土師器・弥生式土器片と，少量の後期を主体とする縄文式土器片が出土した。しかしこれらはほとんど混在した状態であった。

（ロ）遺　物

遺物は，土器と石器で確かな住居址等の遺構がなかったので量は比較的少なく，整理箱へ６箱であった。

土器について文化年代別にみると，縄文式時代前期破片が２，３片，中期後半に属するものが最も多量で，後期と晩期も相当量あった。弥生式時代のものは図版に掲げた，半分完形の壺以外に破片も少量あった。

古墳時代の土器で，土師器はA—５号トレンチから少量，須恵器は図版に掲げた杯以外にごく少量出土した。発掘域内を全般的に観察すると高く（北方）なる程時代は古くなり低く（南方）なる程新しくなる傾向であった。

石器は，石鏃，くぼみ石，石錘等が出土し，石皿，多孔石等を表面採集した。なお，前述したが，A区付近から石棒が数本，農耕中に出土したという。

土器について更に詳述すると次のとおりである。

A区第１トレンチ第３層に前期に属する諸磯C式に比定される土器破片（図版第10図の2）があり，これは十三菩提に比定されるもので，本発掘で出土したものの内最古のものである。他は中期中葉から後葉のものが多くこの拡張部第３層では乱雑な石積みに混入して多量な加曾利E式土器（図版第11 12図，図版第16図）が出土した。これらは同一個体と思われるものもあったが復元できなかった。文様は，綾杉文の中に曲線の沈線が入ったものから，ハ字文に浮線の入ったもの沈線の間に細縄文のあるもの，渦巻文のあるもの等が出土した。恐らく加曾利ＥⅠからＥⅢに比定されるものと思われる。

次にA—５号トレンチからは縄文式時代後期から晩期に至る間と思われる土器破片が多く出土している。沈線と細縄文のあるもの等は堀の内式に近いものであろうし，口縁部に窓状の文様のあるものは後期から晩期に属するものと思われる。（図版第17図，図版第10，14図）これらは比較的緻密で焼の通った胎土で，赤褐色を帯びているものが多い。

本遺跡で唯一つ，第15図のような，疑いなく植物の実の圧痕らしい落込みのある土器片が１片，A—５号トレンチ第３層から出土した。圧痕は２本の沈線の間にはさまれている。この土器片は，同時に出土した土器片と考えあわせると，縄文時代中期後葉以後のものと思われる。

理学博士，植松春雄先生によれば，植物の実とすれば，ツノハシバミ（山梨方言—カシバミ）かカシ属の実と考えられ，焼いて食用になり，長期保存に堪えるという。

弥生式土器はD—１号トレンチから図版第８図（版第15図）が出土したほか，破片が少量出土しただけであった。第８図の出土状態は，寝かされていた壺が耕作によって上半分を削ずり取られたもである。これは胴中央部分が強く張っている，いわゆる算盤玉形のもので，東海地方に多い中期後葉の長床型式に比定するものである。

土師器，須恵器はA—５号トレンチとD—１号トレンチとに少量出土した。土師器は破片だけで復元できなかったが丸みをもった杯の破片や，口縁部等の形状を考えるとおおよそ中期のものが多いようである。

須恵器はA—５号トレンチより出土したものを復元したところ，やや完形に近くなった。（図版第

9図，図版第15図） これは口縁の帯が広くまた口縁部が比較的直立に近い須恵器制作年代では早い時期のものである。

なおA—1号トレンチから円筒埴輪の帯の部分の破片が1個出土したが，このトレンチの250m程北に竪穴式石室の円墳である伊勢塚が，また西約400mに前方後円墳である王塚があるので，このどちらかの古墳のものかもしれない。（この遺跡がある曾根丘陵上には円筒埴輪をもつ古墳が数基ある。）

石器は数種発見されている。

まずくぼみ石はA—1号トレンチより破片を含めて3個（図版第15図）この内1個は，岩であり，A—7号トレンチから破片を含めて3個出土している。

黒曜石製石鏃はA—1号トレンチ第1床面より4個（図版第6図，図版第15図）黒曜石製石錐が1個破片を伴って出土した。同トレンチ拡張部から多孔石が半壊を含めて，4個（図版第7図）他のトレンチから同破片が2個出土した。石錘がA—2号トレンチ第2層（攪乱層）から1個（図版第6図）が出土した。なおサイド・スクレイパー状石器とエンド・スクレイパー状石器（図版第6図）がA—1トレンチとA—7号トレンチから出土した。この外，表面採集で石皿の破片図（版第7図）や多孔石数個を得た。また前述したがA区の畑より石棒数本を地主が耕作中発見した。

以上遺物について記したが，確かな遺構がなかったので遺物の位置づけも十分にはできないのが残念であると共に，整理も乱雑で見にくい点もあるが，ご判読いただきたい。

4. おわりに

本県の遺跡の3分の1は甲府盆地の東側に連なる曾根丘陵とその北にある数扇状地上にあるといってよい。

曾根丘陵上はローム層の上を浅くあるいは深く暗褐色土（耕作土）が覆っていて，ごぼうや，長（山）芋の作付に適している。また桑園も多いのだが，曾根丘陵上はほとんど耕地になって深く耕やされているところが多い。この耕地の中を走る農道を拡張する工事であり，急を迫られた発掘調査であったことや加えて本県考古学の後進性があって十分ではなかったが，一応調査を終了した。

甲府盆地の冬は寒さが厳しく，零下10度に達することもあり，北風は，しばしば台風級の強さになる。

本遺跡がある台地上でも，穏やかな日和あり，降雪あり，寒風吹きすさぶ日もあったが参加者全員一致協力して無事発掘調査が終ったことを喜びとしたい。

最後に発掘参加者（測量，写真撮影等を含む）を始め，ご協力くださった人たちや報告書作成をした人たちの氏名を記しておく。

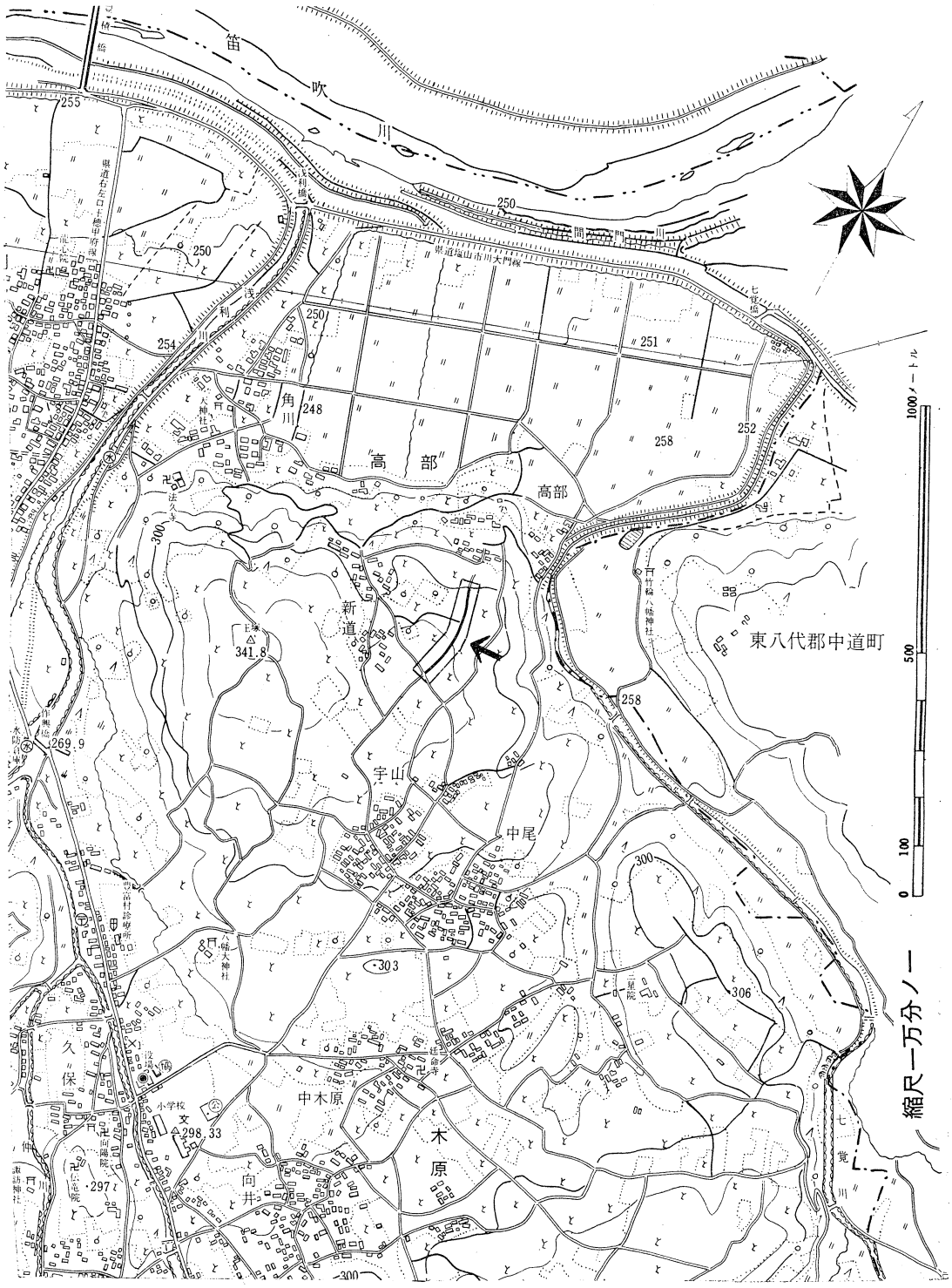
山梨県遺跡調査団　井出佐重（団長）　上野晴朗（発掘担当者）　折井忠義，早川方明，萩原三雄
渡辺敏雄，渡辺礼一，桜林芳秋　森和敏（執筆）

山梨大学考古学研究会員，ほか　一寸木和広，安部真一，中島芳美，宮下敬子，渡辺孝子，
鈴木康男，浅川まゆみ，笠井美幸，土屋泰広

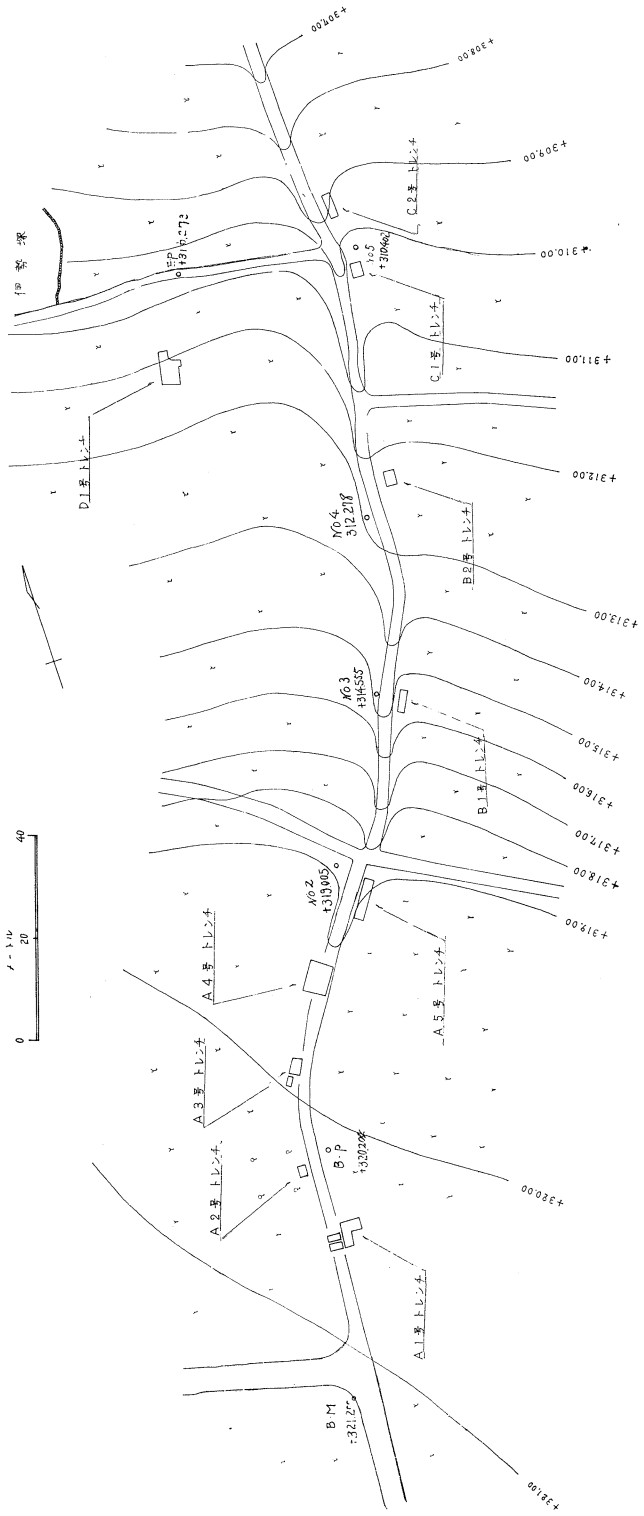
豊富村教育委員会事務局　志村量美，長島幹夫

豊富村郷土研究会　志村量美　外15名
石原　弘　（宿舎）

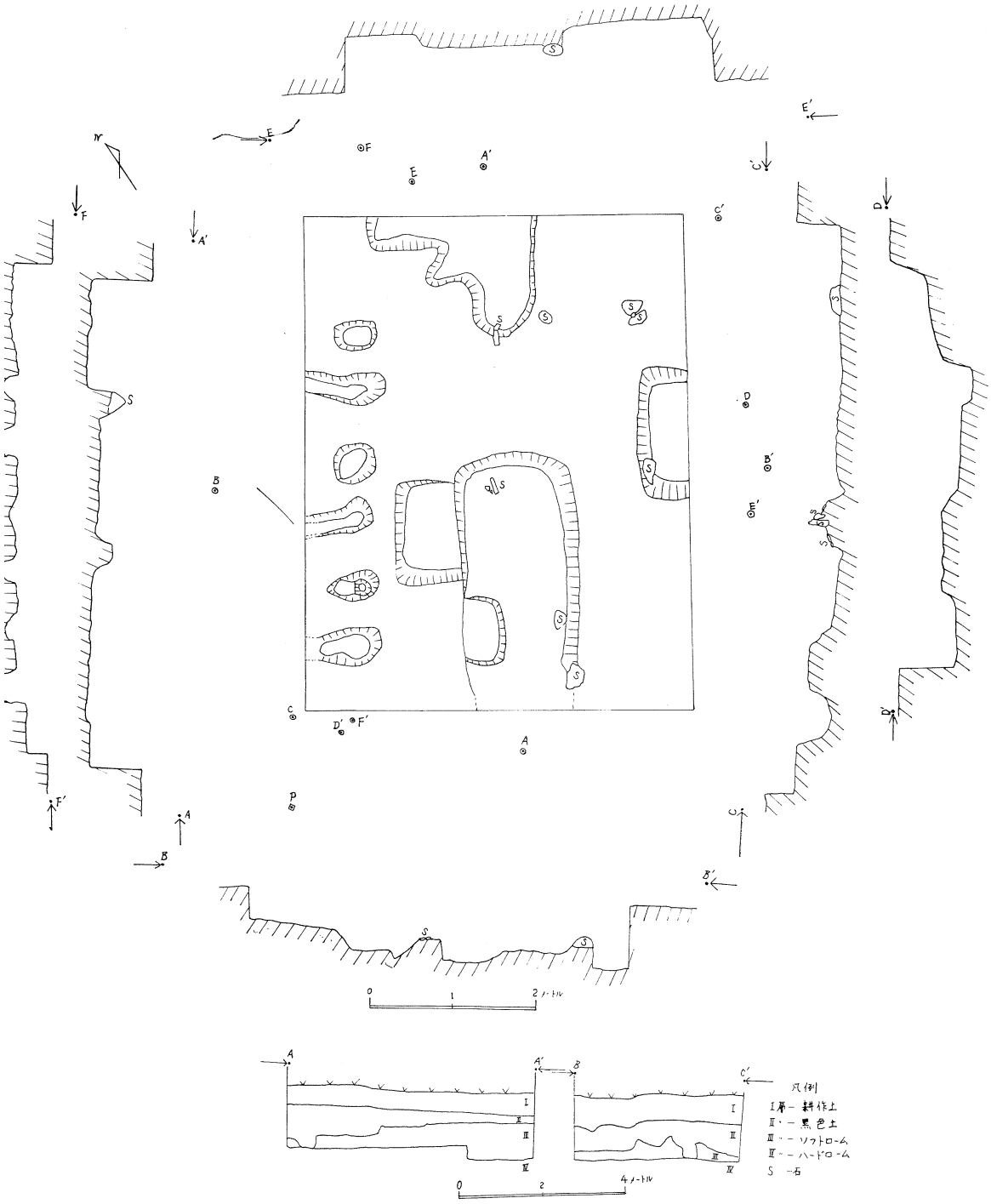
山梨県教育委員会社会教育課文化財係　波木井市郎，末木健



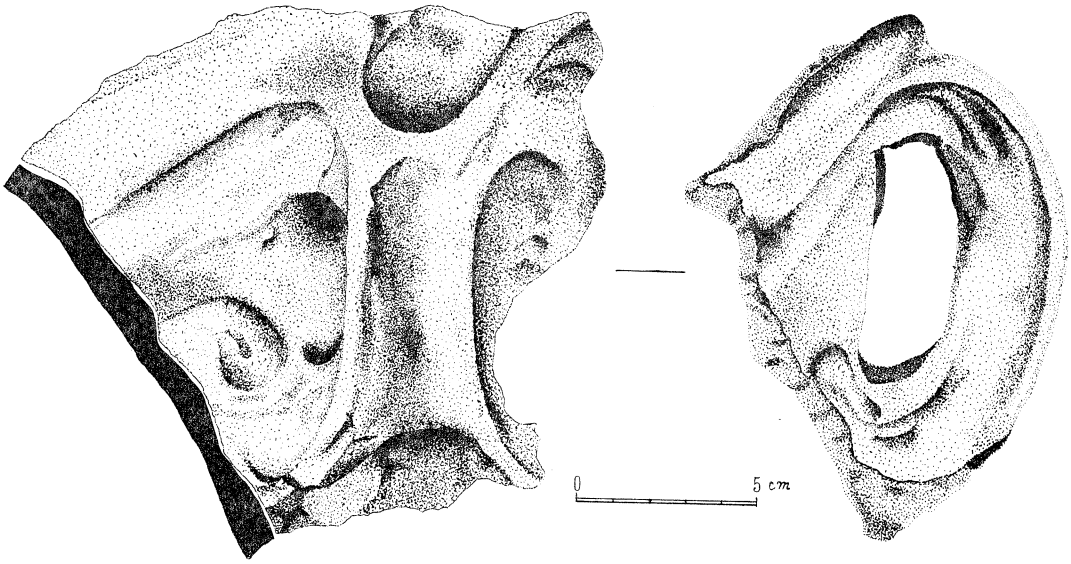
第１図　豊富村宇山平遺跡付近図



第３図　宇山平遺跡調査区域地形図



第４図　特殊遺構（A―４トレンチ拡張部）



第5図　縄文土器破片（A—1トレンチ）

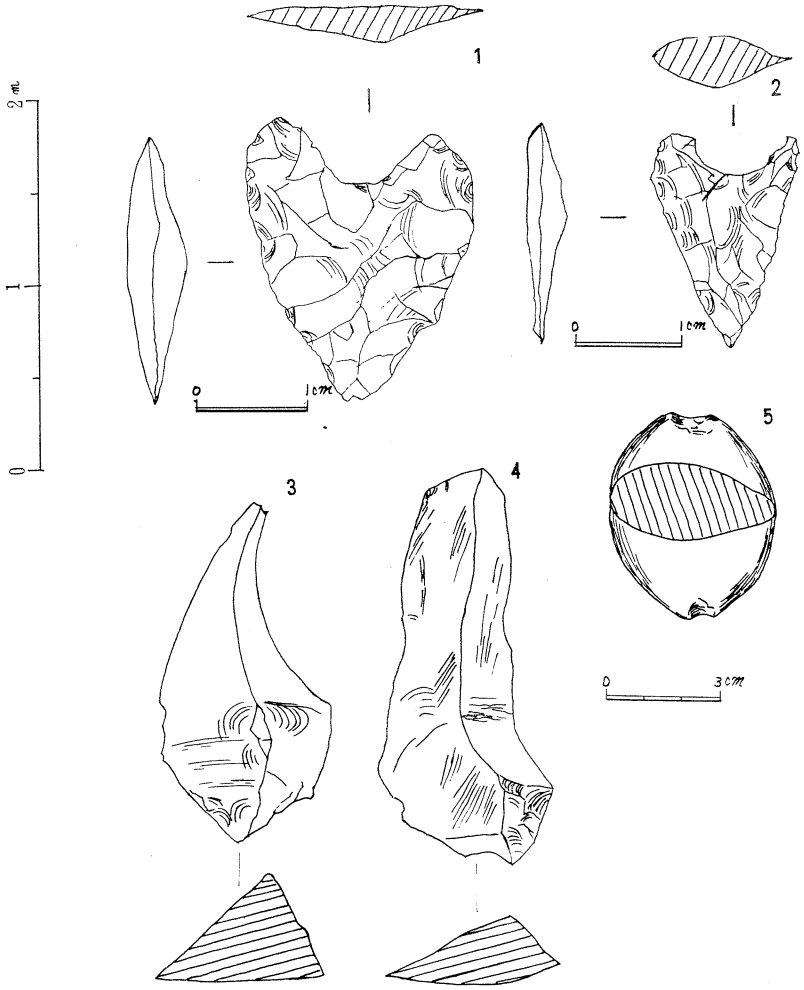
第6図

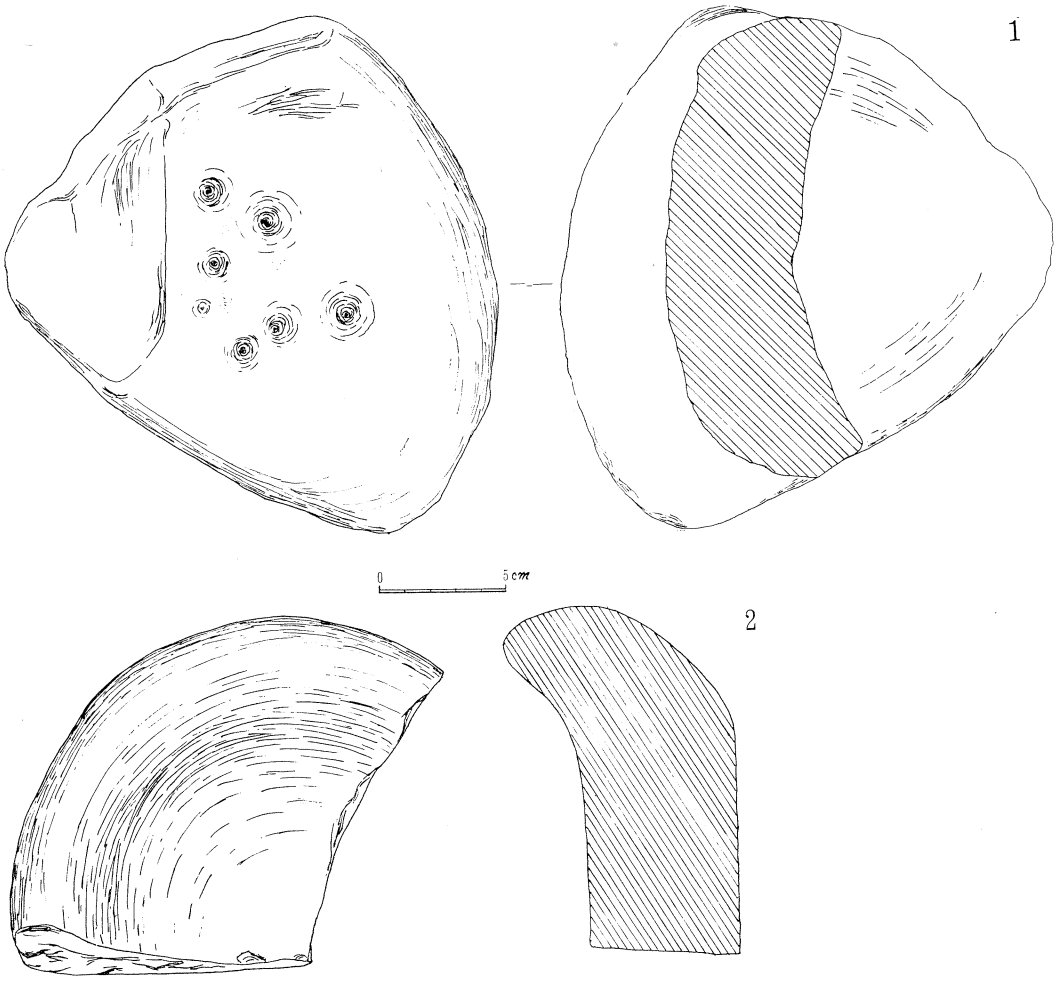
1.2 石簇（黒曜石製A—7トレンチ第1床上）

3. サイドスクレイパー状石器（黒曜石製A—7トレンチ）

4. エンドスクレイパー状石器（水晶製A—1トレンチ）

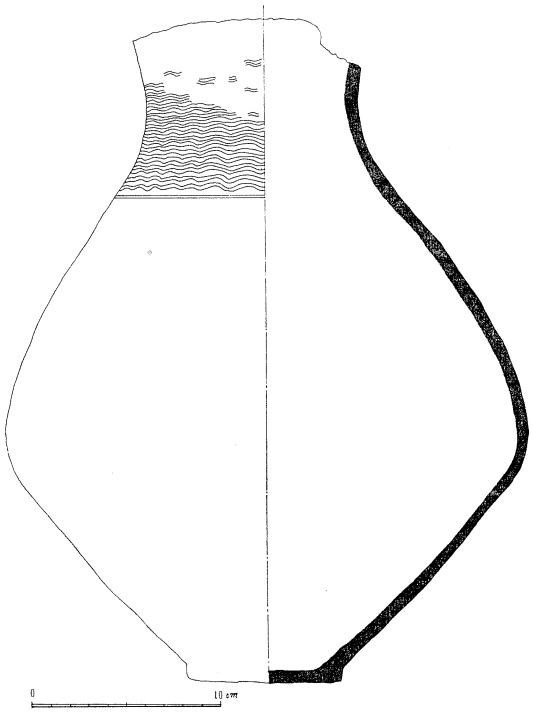
5. 石錘（A—2トレンチ第2層）



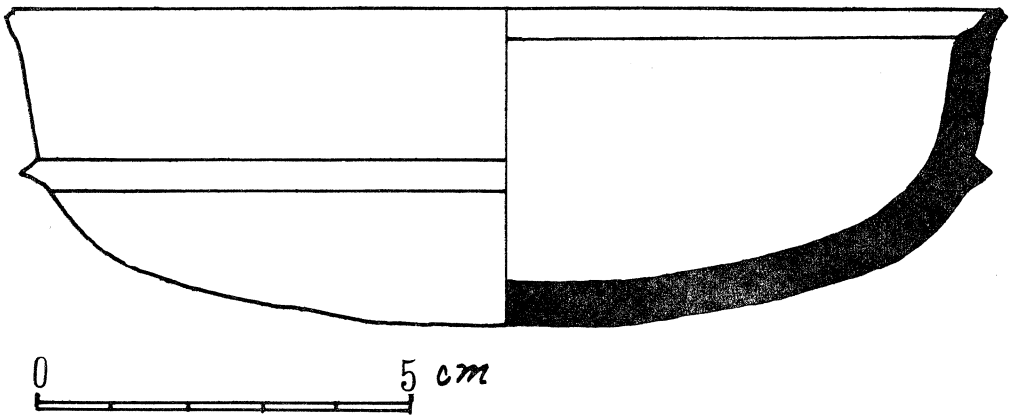


第７図　　1．多孔石（A石第１トレンチ拡張部）

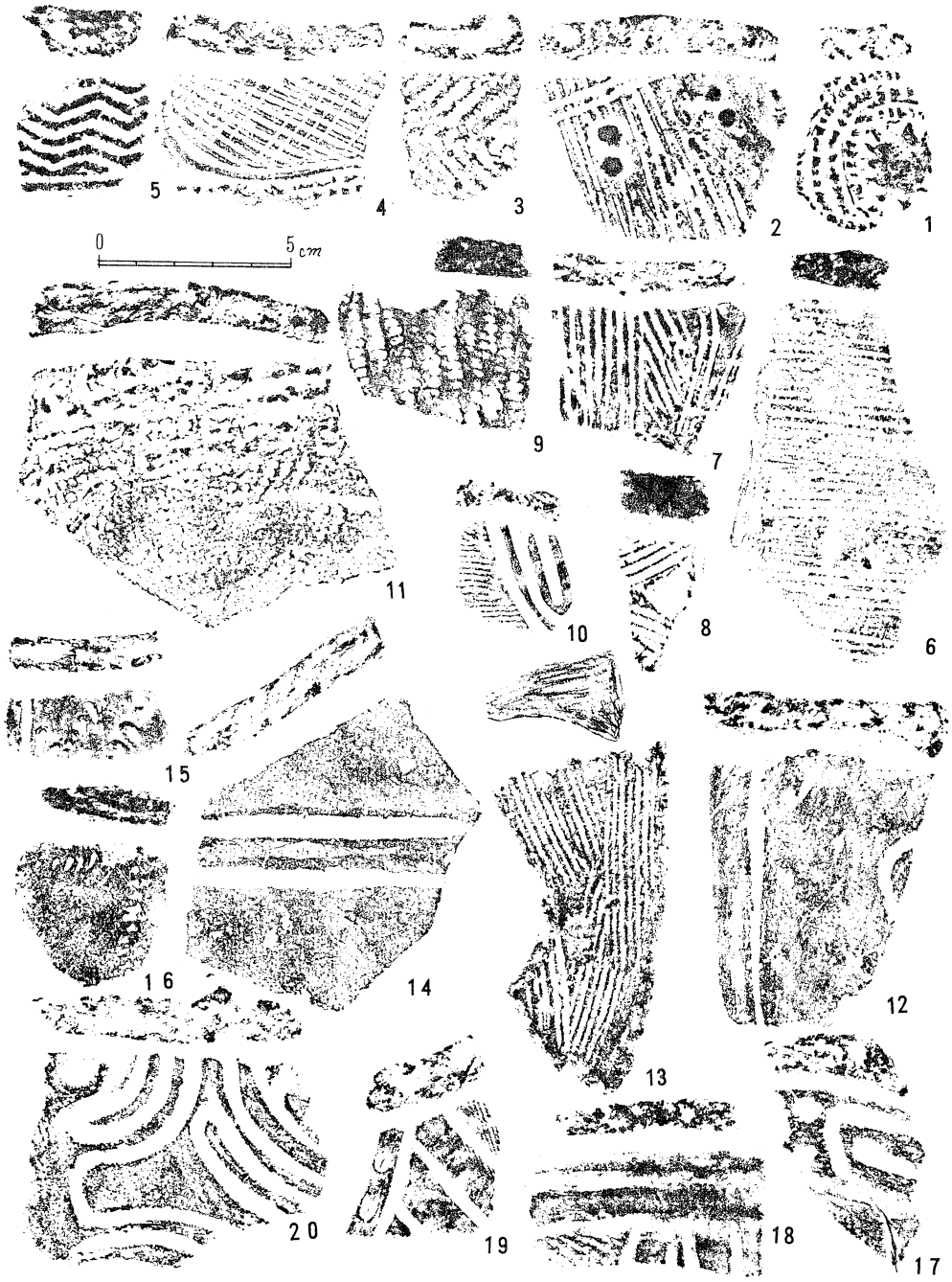
　　2．石皿A（区表面採集）



第８図　弥生式土器壺（伊勢塚２区第３層）



第９図　杯（須恵器）Ａ―５トレンチ第２層



第10図　A区出土の土器石影

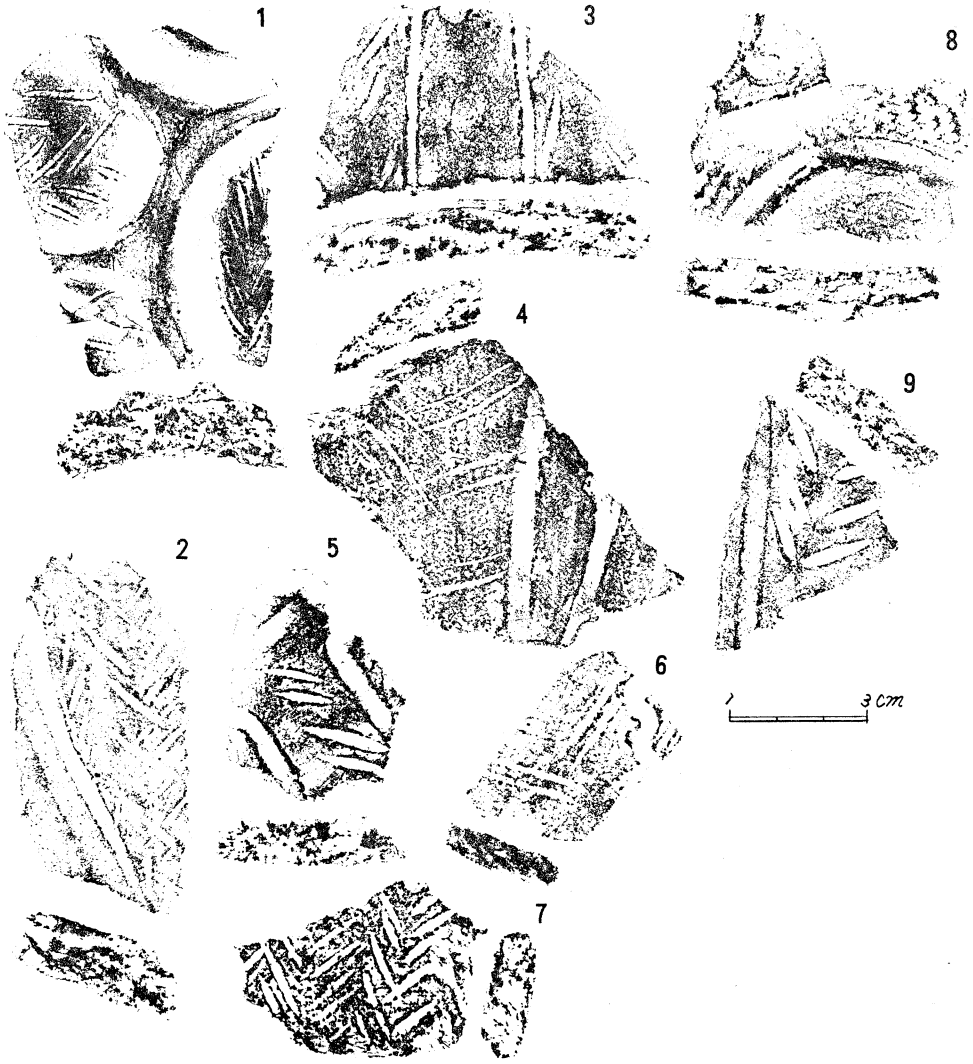
1.2.A—1第3層，3. 7. 9. 15. 18A—1表土

4. 5. 14. 16. 7. 19. 20A—5トレンチ第3層

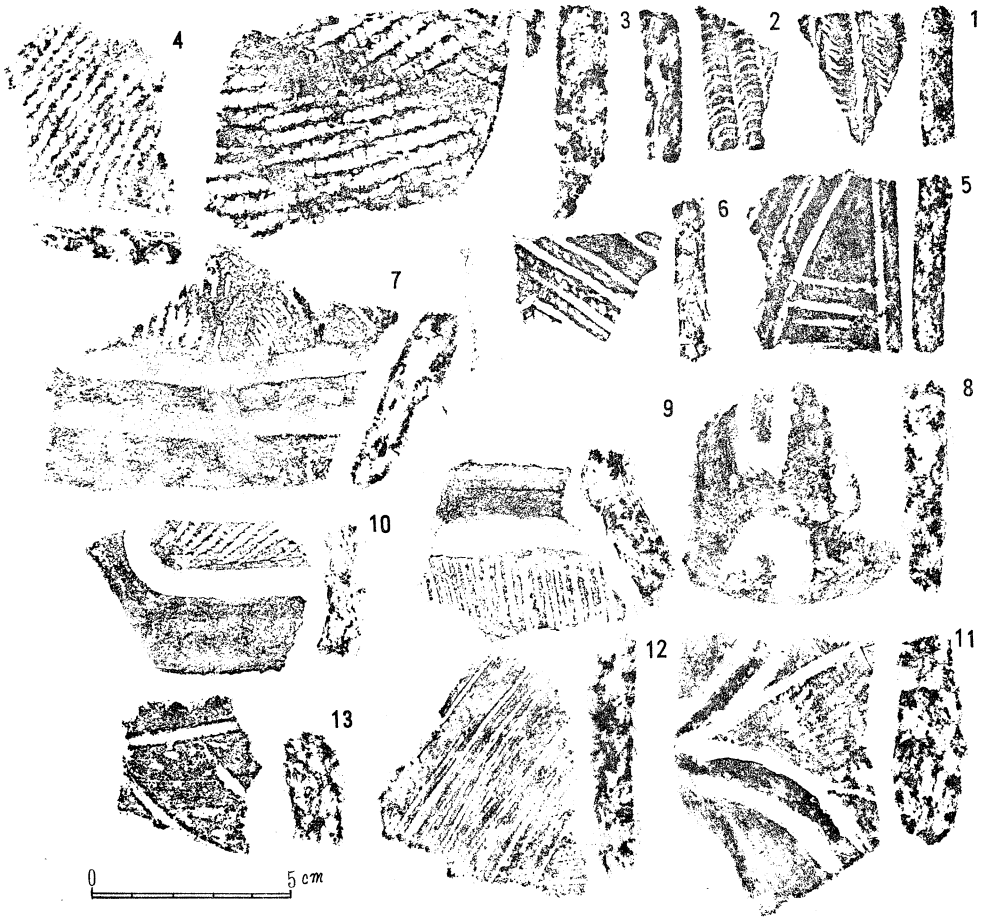
6. 8. A—1トレンチ第1床上

11. 13.A—3トレンチ第3層　12A—6トレンチ表土

第11図　1—9 A区第1トレンチ拡張部第3層
10A—1トレンチ床上　11A—5トレンチ



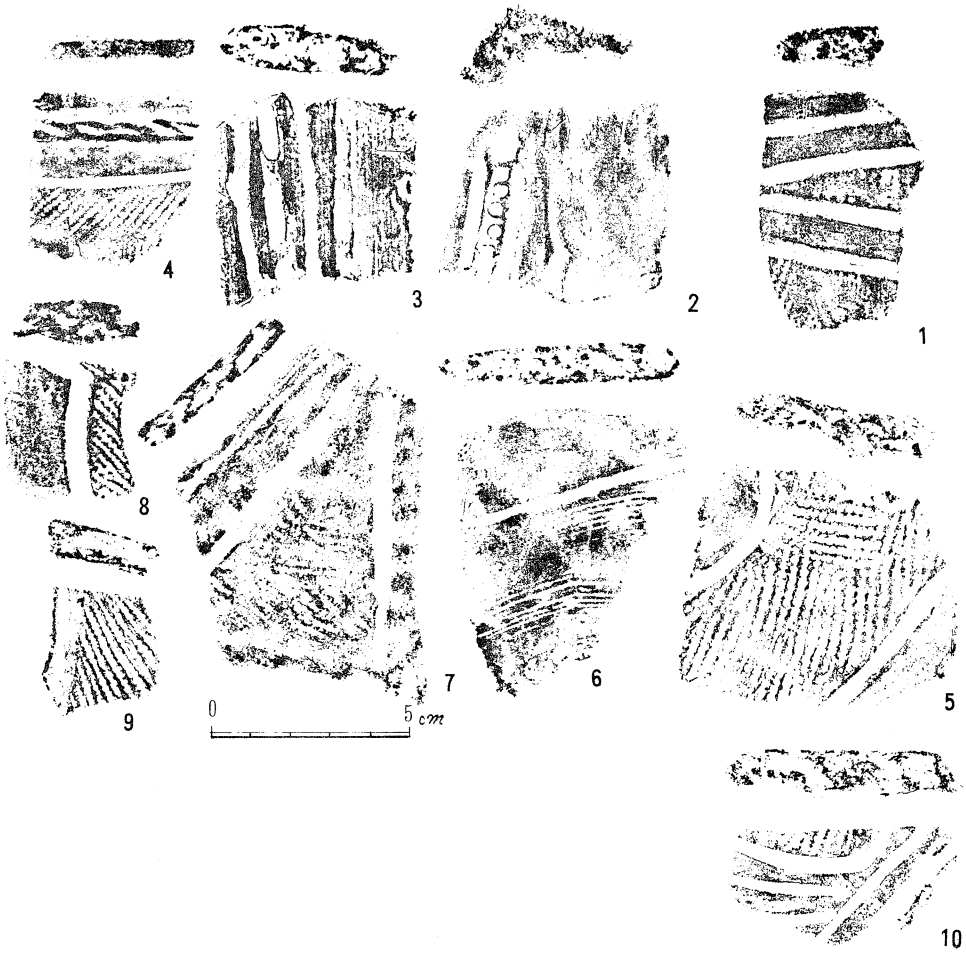
第12図　1～5．7～9　A—1トレンチ拡張部第3層



第13図　D区出土の土器片拓影

1～5.11　D—トレンチ第5層　　7—10　D—1トレンチ

6 D—1トレンチ第4層　　12.13　D—1トレンチ第3層



第14図　A区出土の土器拓彩
　　1～4.6.10　A—5トレンチ第3層
　　5.7～9　　A—1トレンチ第3層

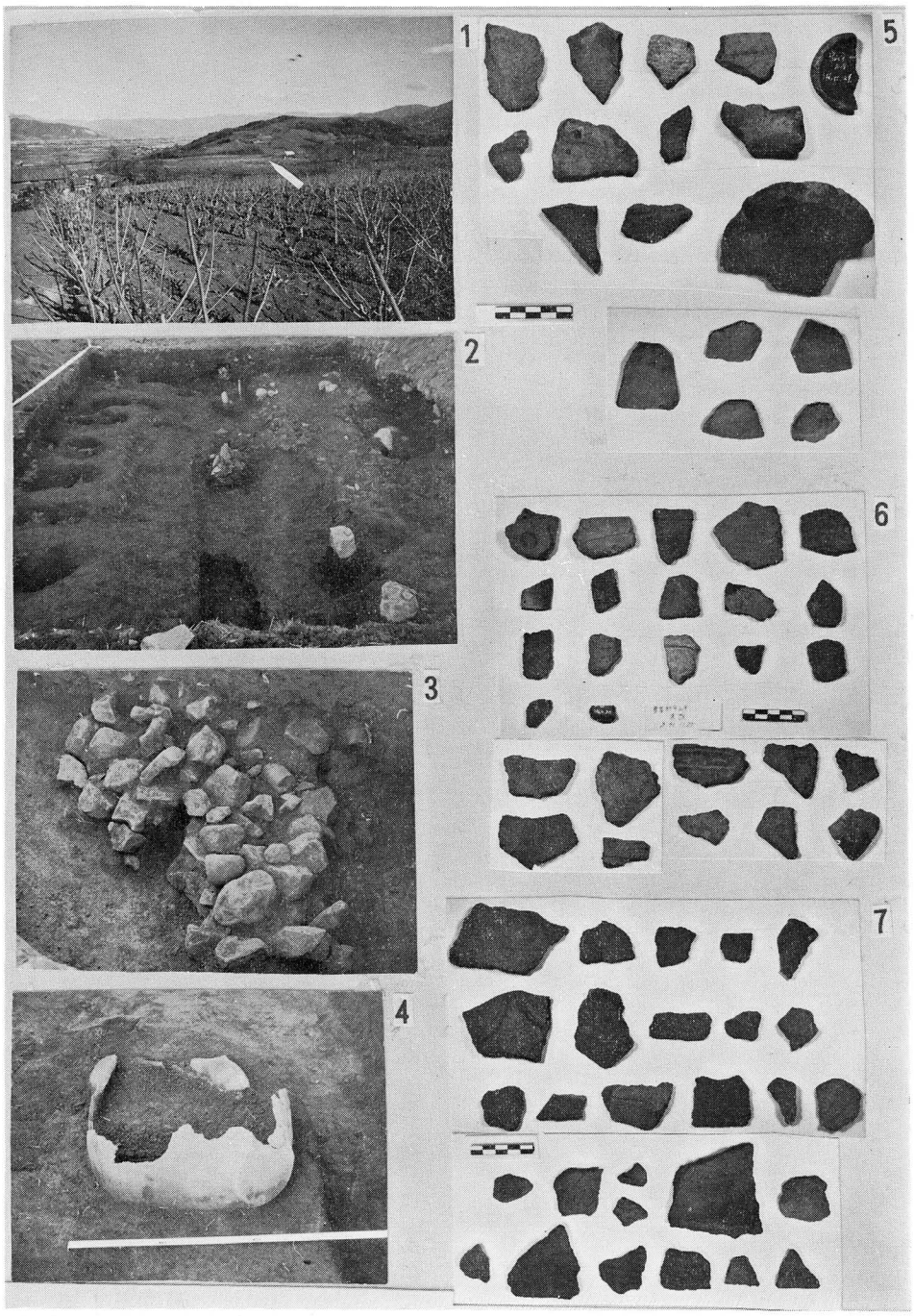
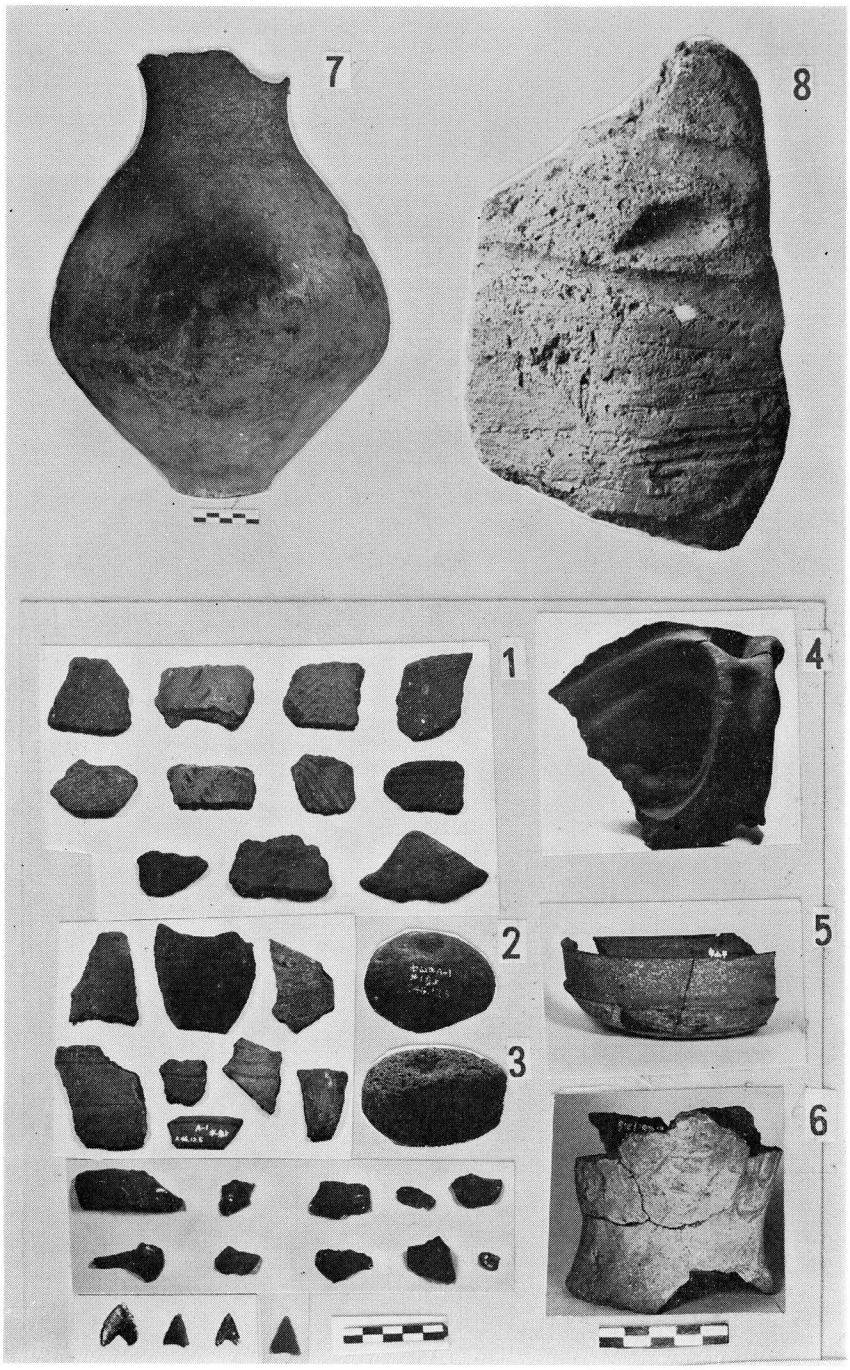


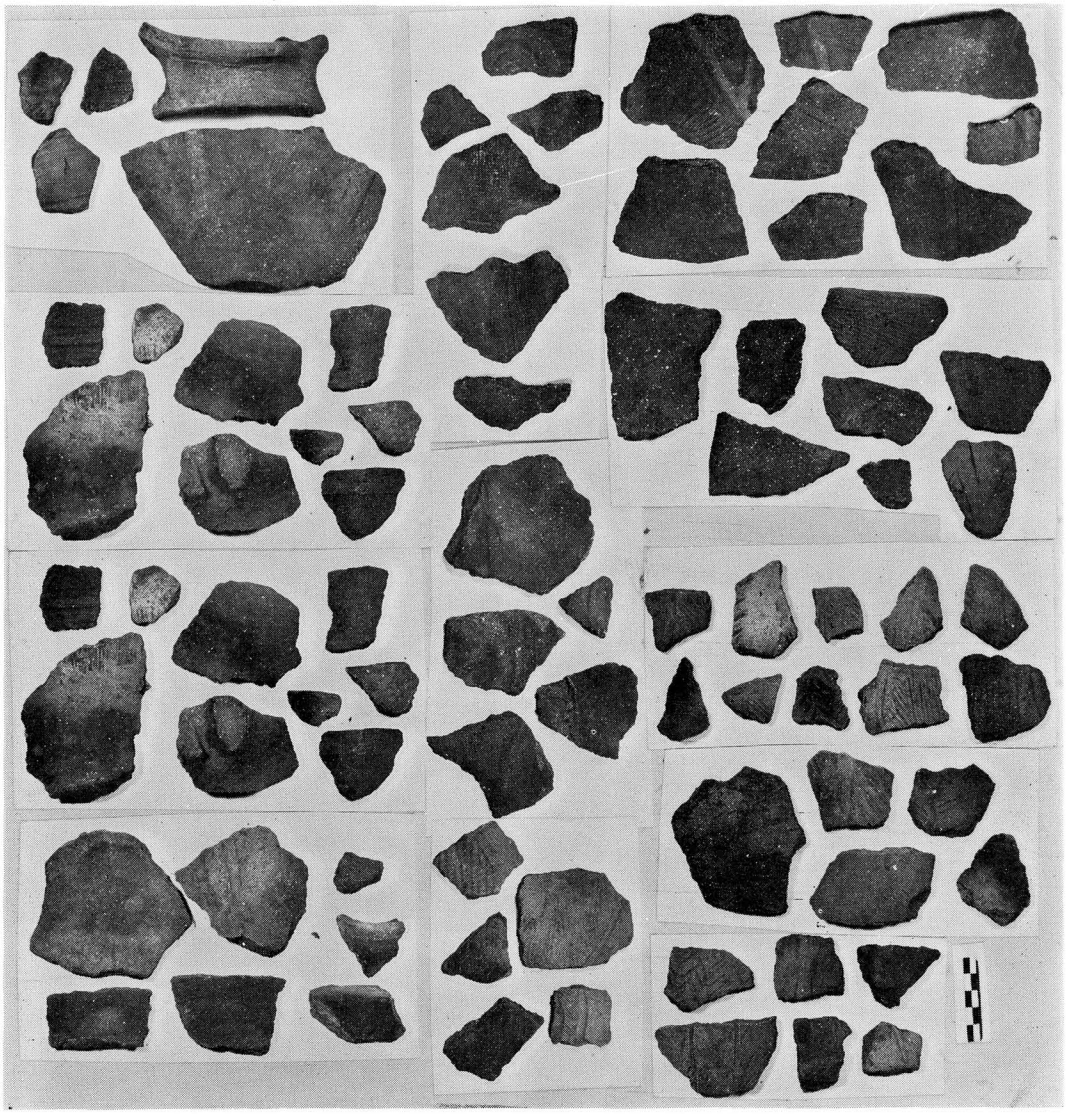
図 版 第 2 図

1. 宇山平全影（背後は米倉山，甲府盆地）
2. A 4 号トレンチ
3. A 1 号トレンチ拡張部積石遺構
4. D 1 号トレンチ弥生式土器出土状態
5. A—9 トレンチ出土の縄文土器，土師器
6. A区表面採集の縄文式土器
7. 上　　同



第Ⅰ5図版

1～3　A—1トレンチ第1床面出土の土器，石器
4～6　A—1トレンチ拡張部第3層
5.　A—5トレンチの須恵器
7.　D—1トレンチの弥生式土器（長床式）
8.　A—5第3層のカシハシバミらしき圧痕

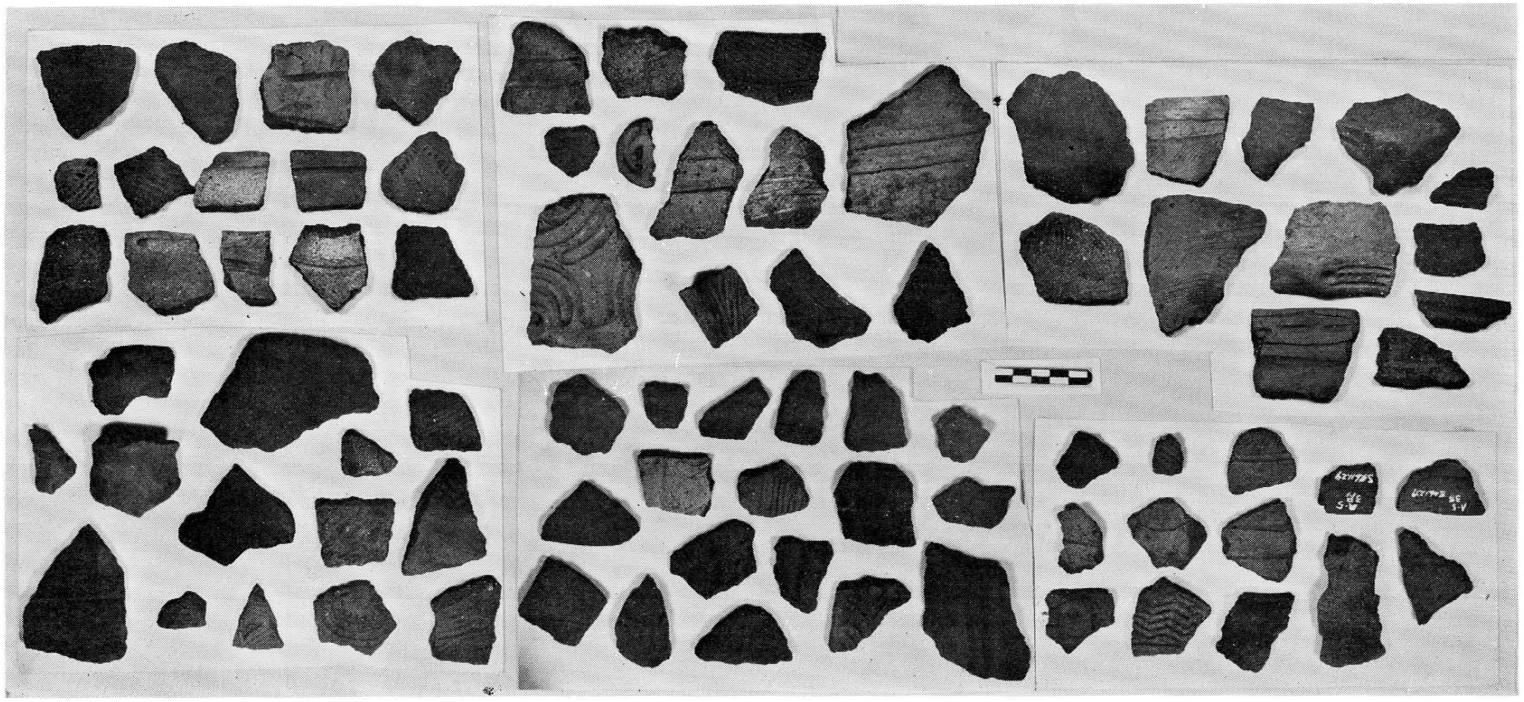


図版第１６図

A—１トレンチ拡張部第３層（縄文土器）

図版第17図

A—5トレンチ第3層（縄文）



昭和38年３月25日印刷
昭和38年３月31日発行

金川曽根地区大規模農道建設及び
畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵
文化財緊急発掘調査概報

発行所　山梨県教育委員会

印刷所　㈱峡南堂印刷所

1973. 3. 31

1